

# 森鷗外とインド学・仏教学

杉山二郎

## はじめに

わたくしは森鷗外先生の文業に親炙すること多年に涉っている。かつて木下杢太郎が「森鷗外」と題する一文を艸した折に、その餘論として人口に膾炙する次の様な評を加えたことがあった。

「森鷗外は謂はばテエベス百門の大都である。東門を入っても西門を窮め難く、百家おのおの其一兩門を視て而して他の九十八九門を遺し去るのである。」（『藝林間歩』一九三六年六月、岩波書店刊所収、四八頁）

そして更に「其他鷗外と漢文學、漢詩、鷗外と國文學、和歌、鷗外と佛典、鷗外と哲學、美學等解説を要するもの頗る多い。皆余の能はざるものである。幸に鷗外易簣の後に現はれた諸家の追憶談中に、斷片的ながら、之を窺ふに足るものが多く存する。」（同上、五〇頁）

と指摘された。鷗外先生の文業に対する興味関心が如何に多岐に涉らなくてはならないか、押して知るべきであらう。そのため案内書チチエローネの多くを架藏嗜讀してもきた。先生歿後前後より刊行せられたこの種の著作は架藏する冊數で百種近くに及んでいる。その雄の二、三を舉ぐれば、日夏耿之介著「鷗外文學」（昭和二十二年十二月實業之日本社刊）澤柳大五郎著「新輯鷗外劄記」（平成元年八月、小澤書店刊）があり、若き研究者小堀桂一郎氏が

「西學東漸の門」（昭和五十一年十月、朝日出版社）他の研究案内書、また竹盛天雄著「鷗外その紋様」（昭和五十九年七月、小澤書店刊）も注目するところであった。鷗外文学研究は概論から各論岐路に入って汗牛充棟枚挙に暇ない程多數に及び、森鷗外記念会の刊行する機関紙「鷗外」は平成十一年一月に六十四号を数えて、多くの研究論考が登場している。

わたくしも且て一度鷗外文学について論究した涓滴を蒐めて上梓しようと思ったこともあり、研究的に嗜讀しているのであったが、餘りにも多くの著作出現にむしろ辟易してしまい筐底に埋めたままになっている。けれども鷗外文業の沃野にあつてその鋤鋤の未だ入れられていない分野もないわけではない。木下杢太郎が自ら難しとした分野の幾つかがそれである。わたくしは自らの学業の過半が木下杢太郎の文業の餘滴から始まつていて、その仏教美術研究、仏教文化論もその支流の一部に過ない。そしてその淵源の一つたる森鷗外の仏教学、インド学は常にわたくしの関心興味の一つであつた。

先年吾が国際仏教学大学院大学の公開講座の席で、予定演者の欠席のために遽かに代弁する破目となつたので、急遽年来温めてきたテーマの一つであつた「森鷗外とインド学・仏教学」と題して講演したのだった。約二時間での論旨は殆んど序論で終始したため、此処に紀要の機関を借りて一文を草して欠を補うこととしてみたに過ぎない。このテーマが鷗外文学研究の分野で殆んど未開拓であるとの口実が、筆硯を執らしめた主要原因であつて、その世に容れる所となるか否か保證の限りでない。

## 一 森鷗外留学以前の仏教知識

鷗外森林太郎の搖籃期、すなわち木下杢太郎の「森鷗外」（前掲論文）に載せた生活時期を分つ仕方に従うと、出生少青年の時代（文久二年（一九六二年）の出生より明治十四年（一八八一年）二十歳、大學卒業の時まで、

二、軍醫副及び留学の時代（明治十五年（一八八二年）二十一歳より二十一年（一八八八年）二十七歳まで）と期を分っているが、わたくしは留学前の鷗外の知的要求のなかの仏教学ないし仏教文化へのアプローチの有無を検討することにした。

津和野滞留期、所謂搖籃期における仏教寺院を中心とする寺小屋の洗礼は皆無であつて藩養老館で四書五經、儒学の教授を受けていたこと、例えば自伝的色彩の濃い「キタ・セクスアリス」のなかに、

「七つになった。／お父様が東京からお歸になった。僕は藩の學問所の址あとに出来た學校に通ふことになった。」

とあるのに徴して知られる。この間の詳細な學問歴を記したのが、令弟森潤三郎氏の「鷗外森林太郎」（昭和一七年四月、森北書店刊）の「出生より上京まで」の一文である。

「兄は慶應二年（一八六六）五歳の春から親戚で藩の儒者米原綱善翁に就いて學問を始めた。當時學問といへば漢學が主であつたから、先づ大學より初めて中庸、論語、孟子の素讀を受ける事となつた。父は藩命で蘭醫方を學ぶために江戸の松本良順翁、佐倉の佐藤尚中翁など斯道の大家に随つて、修業に餘念がなかつたから、兄の復修の監督は母の任であつた。（中略）宅から米原先生の宅まで十餘町あつて、毎朝六ツ半時（今午前七時前）に着くやうに出かけるのであるが、犬が恐いのと、途中他の兒童に悪戯されるのを畏れたので、祖母が途中まで送つて行き、歸りは米原の家人に送つて貰つた。／翌慶應三年から毎月四・九日に藩校養老館に入り、教授山口鼓溪、渡邊積、村田義實諸先生の前で復讀をやつた。養老館は九世隱岐守矩賢侯の代に創建せられて、十二世隱岐守茲監侯の時に大擴張した。幼年の入學者には四書の素讀、二年目には五經、三年目には左傳、史記、漢書を課し、春秋に大試があつて、初年の優等者には四書正文、二年には四書集注、三年には五經を賞賜されることになつてゐた。（中略）賞品は四書集注まで貰つたが、三年目の十月には藩籍奉還の大變動があり、養老館も閉ぢられて五經だけは貰ひ損ねた。（中略）時勢は進んで、漢學萬能の時代は去り、洋學勃興の機運に向つて來た

から、明治三年（一八七〇）より父に就いて和蘭文典を學んだ。後に兄が書いた『サフラン』のなかに、『父は所謂蘭醫である。オランダ語を教へて遣らうと云はれるので、早くから少しづつ習った。文典と云ふものを讀む。それに前後編があつて、前編は語を説明し、後編は文を説明してゐる。』と書いてある。（中略）父は醫療が専門で、その方が多忙であるから、兄は幾もなく藩の蘭學家室良悦翁に従ひ學んだ」（前掲書、三―四頁）

これにより鷗外搖籃期の儒學漢學からオランダ語學へ進んだ様子が詳細に描破されている。

「五年父に従つて上京し、本所小梅村亀井家邸に居り、次いで父は同所曳船通りに一軒の家を求め、國から祖母、母、次兄、姉を招き寄せ、亀井家の用事をすると共に、一般の診療にも應じた。兄は醫學を研究するには獨逸語を知らねばならぬとて、當時本郷壹岐殿坂にあつた進文學社に入ることと定めたが、向島からでは通學に不便なため、神田小川町の西周氏邸に置いて貰つて、其處から通學することとなつた。」（前掲書、四―五頁）

この間の性的軼事を叙した「キタ・セクスアリス」は、潤三郎氏の記述に指摘されるように当時の世粧から人間喜劇の彩りを添えて興味深い。此處に序ながら当時の寄席景物を叙した條りに触れたい。

「家從達の仲間に、銀林といふ針醫がゐて、折々に彼等の詰所に来て話してゐた。これはお上<sup>かみ</sup>のお療治に来るので、お國ものではない。江戸児である。（中略）或日銀林は銀座の方へ往くから、連れて行つて遣らうと云つた。その日には用を濟ませてから、銀林が京橋の側の寄席に這入つた。／書席であるから、餘り客は多くはない。上品に見えるのは娘を連れた町家のお上<sup>かみ</sup>さんなどで、その外多くは職人のやうな男であつた。／高座には話家が出て饒舌<sup>しゃべ</sup>つてゐる。徳三郎といふ息子が象棋をさしに出てゐた。夜が更けて歸つて、閉出<sup>しめだし</sup>を食つた。近所の娘が一人矢張同じやうに閉出を食つてゐる。娘は息子に話し掛ける。息子はをぢの内へ往つて留めて貰ふより外はないと云ふと、娘が一しよに連れて行つてくれると頼む。息子は聽かずにはずんずん行くが、娘が付いてくる。をぢは通物<sup>とおもの</sup>である。通物とは道義心の「道」なる人物といふことと見える。息子が情人を連れて來たものと速斷する。息子が辯解するのを、恥かしいので言を左右に托してゐるのだと思ふ。息子に戀慕して

ある娘は、物怪の幸と思つてゐる。そこをぢに二階へ追ひ上げられる。夜具は一人前しか無い。解いた帶を、縦に敷布團の眞中に置いて、跡から書くので譬喩がanachronismになるが、樺太を兩分したやうにして、二人は寐る。さて一寐入して目が醒めて云々といふのである。僕の耳にはまだ東京の詞は慣れてゐないのに、語家はぺらぺらしゃべる。僕は後に西洋人の講義を聞き始めた時と同じやうに、一しよ懸念に注意して聽いてゐると、銀林は僕の顔を見て笑つてゐる。／＼「どうです。分かりますかい。」／＼「うむ。大抵分かる。」／＼「大抵分かりやあ澤山だ。」（『鷗外全集』第三卷小説一、（昭和二十五年九月、岩波書店刊）二七三―二七四頁）

江戸兎銀林が連れて行つた晝席の寄席は京橋にあつた「植木店」だつたかも知れない。そして噺は彼の「<sup>みやと</sup>宮戸川」の序、お節徳三郎の結ばれる段に違ひない。わたくしも三遊亭円生師、また黒門町師匠桂文樂の高座を熟知している。

「今までしゃべつてゐた話家が、起つて腰を屈めて、高座の横から降りてしまふと、入り替つて第二の話家が出て来る。『替りあひまして替り榮<sup>ばえ</sup>も致しません。』と謙遜する。『殿方のお道楽はお女郎買でございます』と破題を置く。それから職人がうぶな男を連れて吉原へ行くといふ話をする。これは吉原入門ともいふべき講義である。僕は、なる程東京といふ處は何の知識を攫得するにも便利な土地だ。と感歎して聽いてゐる。僕は此時「おかんこを頂戴する」といふ奇妙な詞を覺えた。併し此詞には、僕は其後寄席以外では、どこでも遭遇しないから、これは僕の記憶に無用の負擔を賦課した詞の一つである。」（前掲書、二七四―二七五頁）

この第二の噺家は鷗外先生云う如く吉原入門たる「<sup>あはらし</sup>明烏」の日向屋時次郎が、町内の職人源兵衛、多助兩人に連れられて吉原稻富の遊女浦里に馴染む段を聞いたと思われる。これも亦桂文樂師匠の絶品をわたくしも高座で目睹したことがあつた。森鷗外のみならず夏目漱石も、亦木下杢太郎ら昂群像の頽唐派詩人のなかでも、当時の寄席藝人、噺家の名人藝を聽いていて、それが彼らの資質文脈に多くの影響を与えていたこと、詩文の端々に充

分窺われる。なかでも永井荷風は朝寐坊夢樂の弟子となつて朝寐坊夢之助と名乗つて、前座として高座に登つたことすらあつた。漱石の初期小説は「小さん」の面影を髣髴とし、芥川龍之介の活術に円右のおもかげをみると評した人もいる（日夏耿之介「我鬼窟主人の死」日夏耿之介選集（昭和十八年五月中央公論社刊）二九七頁）。そこには初期谷崎潤一郎の作品「幫間」「少年」などと「ひよつとこ」の交叉する江戸人氣質からの投影も見られよう。

この「キタ・セクスアリス」が執筆されたのが、明治四十二年（一九〇九年）「スバル」第七号所収であつて略三十年前の軼事の一つとして回想されたのだらうけれど、大学在学中屢々寄席戲場に通つて江戸落語、講釈に通曉してゐたことは次の一文によつても知られよう。後の考勸学醫伝三部作「澀江抽齋」「伊澤蘭軒」「北條霞亭」に先ずる札記物の一つ「鈴木藤吉郎」のなかで

鈴木藤吉郎とはいかなる人か。世人の偶たま其名を知るは、松林伯圓に講談安政三組あんせいみつぐみざつぎ盃あるがためであらう。然るに憾むらくは彼の講談は事實に據つて潤色を加へたものではなくて、殆ど全く空に憑つて結撰したものである。（中略）わたくしは關根、櫻木、條田三家の既刊書、越川氏の稿本、佐久間、桑田二氏の談話、以上六人の傳ふる所を併せ考へて、就中據るべきものの尤も多いのは越川氏の文であることを知つた。人は或はわたくしに忠告して、わたくしの言の俗耳に入り難く、隨つて新聞紙に載するに適せざるは考證あるがためだと云ふ。わたくしも必ず否しからずとは云ひ難い。しかしわたくしは今こそ寄席戲場に遠ざかつてゐるが、少壯時代には殆まい毎夕寄席に行き、殆毎月劇場に入つた。そして講釋師が既往の事蹟を討ねんがために、わざ／＼其境を踏破し、席に上つて旅次の見聞を叙するを聴いた。又俳優の故實を問うて技藝上に應用するのを觀た。明治初年の聴衆看客は啻に之を厭はざるのみならず、却つてこれを憚よそんだ。今の新聞紙を読むものが、果して言の考證に涉る毎にうるさがり、もどかしがり、絮語聞くに堪へずとなすならば、是は時運の變遷である。云々」（『鷗外全集』著作篇第十一卷、昭和二十八年三月、岩波書店刊、三一九～三二二頁）

この文によると鷗外先生の大學豫備門から本科卒業迄の書生生活に、寄席の噺や講釋は血肉の一つとなつていたろうと考えられる。

わたくしも今でこそ寄席を遠去っているが、少壯の砌戰中から戰後約十年間は文字通り寄席藝に耽溺し、昭和前半期の名人上手の噺を諦聴したのみならず、荷風の響みに倣つて高座に上つたことがあつた。そして落語の歴史沿革に多大の関心を払つたこともある。そればかりではない。京都の仏教大學の教授の席に就くや、同僚の話藝落語研究家たる関山和夫氏と親炙交流する機会があつた。氏には落語家の祖とも云うべき「安樂庵策伝」の評伝がある。「説教と話芸」「仏教と民間芸能」他の著作もあつた。「落語風俗帖」(一九八五年二月、白水社刊)を繰くと、落語と仏教、落語と仏教風俗の項目があつて、仏教文化の一翼を江戸噺が如何に負うているかが判るに違いない。わたくしが自らの趣好に阿つて妄りに「キタ・セクスアリス」の一端を引いたのでないことは、彼の一書を閲せられた君子諸兄ならば了解せられるだろう。先生少壯期の寄席通いに耳目を通じて仏教文化に触れていたろうことである。

「明治十四年(一八八一年)七月四日東京大學醫學部を卒業し、十二月十六日陸軍軍醫副に任ぜられ、「東京陸軍病院課僚被仰付候事」の辞令を授けられて陸軍に出仕した。」由を森潤三郎氏は述べているが、山田弘倫著「軍醫森鷗外」(昭和十八年六月、文松堂書店刊)によると、

「其年(明治十四年)十二月十六日先生は愈々陸軍々醫副に任ぜられた。是實に我衛生部殿堂造營の爲に大なる礎石が置かれたことであつた。(中略)任官と同時に東京陸軍病院課僚を仰付けられ、其時特に普魯西<sup>プロシア</sup>の陸軍制度取調を命ぜられた。そこで先生はプラーゲルの陸軍衛生制度書を基礎として大部の著述に従事し翌年三月功成りて遂に醫制全書稿本十二巻を編み、之を上司に提出した。

明治十五年(廿一歳)二月七日第一軍管徵兵副醫官を仰付られた。／右は下士教導團募兵の次級検査醫官であつた。／同

月十七日初めて従七位の位階に叙せられた。／同年五月十一日軍醫本部課僚を仰付られた。／今日の醫務局課員である。そして翌十二日其の職務分擔として庶務課僚を仰付られて醫事行政を管掌することとなった。當時の軍醫本部長は林紀氏で、其年九月から松本順氏、其下に實權を握って居たのは石黒忠惠氏<sup>たけのり</sup>であった。庶務課の筆頭は長瀬時衝氏で小松維直、落合泰造、守屋、小尾、設楽等が先生の同僚であった。（前掲書、五―六頁）

とその詳細を伝えている。林紀、松本順、そして石黒忠惠らについて知る所が多かるうし、鷗外の小倉左遷人事の黒幕とも云うべき石黒忠惠氏について、多くの人が指摘する所である。しかし庶務課筆頭長瀬時衝氏の名が見えるのは、わたくしをして眼を聳動させずに居ない。彼が仏典仏教學に精通する人だからである。このことに関しては藤井宣正愛棋居士の「愛棋全集」（明治三十九年十一月、島地大等編、森江書店鷄聲堂書店刊）所收の附録、自傳（愛棋仙士半生の記）に次の様に記されている。

「（明治）十二年年の春、（中略）強ゐて請ふて出京を許され、飯塚善作といふ學友と共に上京し、日暮里村に僑居せられたる同國人、鬼頭悌次郎氏に寄食し、後には一番町四十七番地なる島地黙雷<sup>もくらい</sup>氏の家に寄宿せり。仙士は島地黙雷の名を聞き居たれど、この人に依らむとは始めは思はざりしなり。柳野叔が往年長崎に醫を學びし時、學友に長瀬時衝といふ人あり、仙士が初めて東上せし頃は陸軍々醫正たり、長瀬氏は島尾得庵、島地黙雷などといふ人と親交あり共に佛教を研究し居れば、その人に紹介せむ、就て學問の方針を定むべしとのこと、長瀬を訪ひしに、坊主子のことは島地に謀るに如かずとて、書生に案内させて、一番町に島地翁を訪ひ、立志上京、希望は英學を修むるにあることを述べしに、翁は自身の安心は如何ぞやと推問せられて、仙士は學佛のことは世間の學を修めて後にせんと述べしに、そは大なる誤なりとて仙士が言は聞かせず、（中略）是非なく心を決し番町の翁の家に寄宿することに決し云々」（前掲書、六二―六三頁）

と、長瀬時衝の軍醫正にして仏教學に造詣深く、島地黙雷、息子大等と親炙する人物として描かれている。因みに「日本人名大事典」（一九三〇年十二月、新撰人名大辭典、一九七九年七月復刻版、）第四卷を見ると、



「ナガセトキヒラ、長瀬時衝（一八三六—一九〇二）幕末、明治中期の醫家。一等軍醫正。通稱古輔、幼名定吉、號は靜石。天保七年二月十七日、岡山藩士田中時長（通稱左吉）の長男として備前御野郡長瀬村に生る。長じて大阪に赴き緒方洪庵の門に入つて蘭學と醫學を習ひ、次いで京都に出でて廣瀬元恭に師事し、赤澤寛介に洋書を學んだ。時に二十一歳であつた。當時頼三樹、梅田雲濱らと交はり、名を元藏と改め新野と號した。二十五歳の時長崎に遊びボードウィンに就いて蘭學を修め、學成つて歸郷し、藩主池田侯の侍醫に擢でられたが、衆醫の猜忌に遭ひ、西洋の邪宗を信ずる者として禁錮三年の刑に處せられた。明治二年赦免釋放せられ小豆島に閑居した。明治四年兵部省に徴されて大阪軍事醫院に奉職し、同七年壹灣征討軍に従ひ二等軍醫正となり、次いで佐賀の亂に砲兵隊附として出征し、十年西南役には大阪陸軍病院西京出張所に勤務し、十八年廣島鎮臺軍醫長となり、十九年勳四等旭日小綬章を賜はり、二十一年第五師團軍醫長、二十四年陸軍省第一課長心得、同年六月東京衛戍病院長兼衛生會議員、二十五年從五位に叙せられ、二十六年一等軍醫正となり同年四月退役、正五位に叙せられた。次いで東京飯田町に仁壽病院を開き、始めて西洋マッサージ研究所を設けた。明治三十年病氣のため岡山に歸り、同三十四年九月二十日歿。年六十六。」（小川）

の閱歴が知られる。右の記事に徴する限り、後半世は兎に角、大阪の緒方塾に入り京都に出て廣瀬元恭に蘭學を學ぶ傍、京洛の尊王攘夷の志士頼三樹三郎、梅田雲濱らと交流があるなど、破瀾萬丈の赴きがある。そのみならず岡山池田侯の侍醫に聘されたにもかかわらず、キリスト教信者に擬せられて禁錮されるなど、長瀬氏の行状に多くの矛盾が隠されている所がある。鷗外が長瀬氏の下僚となつた明治十五、十七年の砌、石黒忠惠の指揮下にあつたことになる。ここで注目されるのは石黒忠惠の「懷旧九十年」の記述である。岩波文庫に收められた折、「近代醫學事始」ともいふべき草創期勉學の苦勞話のほか、軍医徴兵制度の創設、兵食問題など、近代日本の一側面が内側から語られる」と帶の宣伝文にあるように、彼の懷旧手柄譚の趣なしとしない。その内「第五期、兵部省出仕より日清役まで」七西南戦争、大阪臨時病院の項に、件の長瀬氏の活動と交錯する所がある。

松本総監は後方の万事を一切私に委任されました。大阪に着いた晩から病院の一室に泊り込んで、一日余りここで諸準備に忙殺されました。（中略）最初に起った問題は、多数の負傷兵を收容する大病院をいづこに置くかでありました。当時熊本が戦争の中心地になっており、また長州人が多く局に当っておりましたから、長州の人々の運動もあり、官軍では馬関（下関）に大病院を設け負傷兵を收容しようという計画でありましたが、（中略）四通八達の大要港たる大阪に臨時病院を設けるが宜しいという説を頑強に主張して遂にこの議が容れられ、直ちに大阪に臨時病院を設けることになり、病院長を命ぜられました。そこで大阪の陸軍病院と周囲に更に十五棟の病室を急造して臨時病院とし、後には八千五百六十九人の傷病兵をここに收容しました。（中略）専ら交通の点で位置を決定し、ボードインの設計によって建てておいた大阪最初の洋館でありました。」（岩波文庫版、二二九―二三〇頁）

大阪臨時陸軍病院の設計が長瀬氏の蘭學の師ボードウィンであったこと、亦石黒忠恵の傘下で治療に従事したこと、これも後の本部庶務課に同じく石黒の元で下僚となったことも、單なる偶然童子の仕業ではあるまい。石黒は更に続けて云う。

「この病院にあつて私を補助してくれられた人は沢山あつたが、特に記すべきは佐々木東洋氏と佐藤進氏との治療における貢獻であつたのです。この兩人は当時医界の双璧で、前者は内科、後者は外科の泰斗と仰がれていました。」（前掲書、二三〇―二三二頁）

とあり、彼の長瀬氏も「沢山の人」のなかに数えられていたと推して誤りあるまい。

わたくしは長瀬時衝氏の閱歷に興味をもって多少逸脱して了つたかも知れない。今ここで注目したいのは、彼の仏典・仏教學に関する蘊蓄のことである。そして藤井宣正愛棋仙士について一瞥しなくてはならぬ。先づ「日本名大事典」「フジイセンシヨ―藤井宣正（一八五九―一九〇三）。眞宗本願寺派の學僧。勸學宣界の二男、越後三島郡本與板村光西寺に生れ、十八歳長岡中學に入つた。のち東京に出で島地黙雷の家に寓し、一旦京都に赴

いて本山の留學生となり、再び東京に出て明治十七年東京帝國大學豫備門に入つた。二十五年文科大學哲學科を了て本願寺文學寮の教授となり専ら宗門教育に盡し、二十八年埼玉縣第一尋常中學校（今の浦和中學）長に轉じた。三十三年本山の命によつて歐洲に留學し、主としてロンドンで教會制度印度美術等の調査研究に従ひ滞在すること三年、三十五年法主光瑞の印度佛蹟踏査の一行に加はり、その足跡印度全島周しと云はれた。別れて獨り再びイギリスに航せんと欲して船中に病み、マルセイユに上陸して同地で客死した。時に明治三十六年、年四十五。著作に佛教小史、大藏經冠字目錄、審美大觀解説、支那佛教史、英國教會制度概説があり、また愛棋全集、佛教辭林がある。なほ明治二十六年東京白蓮社會堂で佛式結婚を行つたが、これその權輿である。」と見えてゐる。わたくしは「佛教小史第一卷印度部」（明治廿七年九月、大谷津逮堂刊）「佛教小史第二卷印度部」（明治廿九年六月、大谷津逮堂刊）と「藤井宣正遺稿、愛棋全集」（明治卅九年十一月、森江書店、鷄聲堂書店刊）を架藏してゐて、彼の仏教學、広く教會史についての研究の一端を知悉している。その愛棋全集編纂の序のなかに「遂に先師の遺稿として公にすべきもの『佛教聖像解説』と『印度佛蹟調査報告』と及び『愛棋全集』との三集を得て、其中第一回刊行の記念遺稿として、先づ『愛棋全集』編輯出版することに定められたり。」（前掲書、六頁）と見え彼が仏教美術、インド仏跡調査の成果がやがて出現する筈だつたことが判る。彼の日本西域探検を魁した大谷光瑞師の膝下にあつた藤井氏は、ロンドン帰着後中央アジア探検の準備と少壯の橘瑞超、吉川小一郎、堀賢雄らを率いて西域に赴く筈だつたらうと推測して誤りあるまい。病魔の冒すところとなつてマルセイユで客死したのは惜しみて余りある。彼の知友には島地大等、姉崎正治、狩野亨吉、梅原融、榊亮三郎、櫻井義肇、高島圓、杉村廣太郎氏らがあつた由序文中に散見されるが彼の長瀬時衡、島地默雷ら先輩との交流が充分推察されよう。この夭折した藤井宣正氏の大學豫備門、文化大學哲学科在席中及び以後、格別に鷗外と交錯するところは皆無と云つてよい。藤井氏が豫備門に入學したのが明治十七年の砌りであつたから、鷗外廿三歳ドイツ留學の

途に上った歳に当っている。

先に触れたように鷗外が軍醫本部庶務課筆頭長瀬時衝の元にあった頃のことを、山田弘倫氏は次の様に記している。

先生の文藝的造詣は天稟であつた。落合泰造の追懷に據れば『明治十五年頃森君と陸軍省庶務課に机を並べて居た頃には、役所の歸りなぞよく何處かへ往つて古文書を獵り求め、淨瑠璃本の朝顔日記を漢譯したやうな事もあつた。一體君は役所の仕事には餘り熱心の方ではなかつた。君自身いつでもこの仕事は僕の柄ではないと云つてゐた。』といふ事である。武谷水城の書中には『明治十四五年頃であらう源氏五十四帖の歌を漢詩に譯したといふことを耳にした。』と書かれてあつた。（前掲書、六頁）

彼の森潤三郎氏も、

「明治十七年三月東洋學藝雜誌第四十號に『盜侠行』（譯獨逸稗史）を掲げた。Wilhelm Hauff の Das Märchen von Falschen Prinzen（俠盜、阿巴<sup>オルバザン</sup>）を漢詩體に意譯したものである。」（前掲書一〇頁）

と見え、邦文、歐文の漢訳を試みている姿が知られるが、閲藏に涉つたとの知見は聊かも見られない。長瀬氏との交流交渉の片鱗も窺い得ない憾みがある。上官と下僚の間に仏典、仏教學の消息が交されるには、役所の机上では余りにも唐突に過ぎるかも知れない。併し、長瀬氏の仏典知識の蘊蓄を鷗外が全く悉らなかつた筈はあるまいと思ふのだが、如何なものだろうか。これ迄の鷗外研究に長瀬氏の姿は一度も登場したことを管見の及ぶ限り、わたくしも悉らぬのである。長瀬氏が鷗外留學の送別会に姿を見せている点頗る興味を唆る。すなわち山田弘倫氏の文に曰く。

「予は或日石黒子爵の御左右を伺ふため訪問申上げた。談偶々鷗外先生に關する拙稿に及んだ。子爵のお話しは先生渡歐の送別に際してのことであつた。／森の父から倅の渡歐に當つて御馳走はないが鰻だけを差上げたいからと云ふので千住の

宅へ招かれた。長瀬時衝夫妻が同席であった。其時長瀬の妻君が<sup>はなむけ</sup>として詠じた歌を今でも覚えて居る。異國にあるか知らねどほととぎす／雲井はるかに鳴きぞ傳へよ／と云ふのであった。」（前掲書、八頁）

石黒忠憲と長瀬時衝夫妻が森靜男、賢母峰の周旋した送別会に同席して鰻料理を食している。推するに鰻は今日尚小塚原刑場に近く開業している「尾花」から取寄せたものでなからうか。そして鷗外林太郎の直屬上官として石黒忠憲と長瀬時衝が選ばれたが、極く内輪の宴として賢母峰子が差配案配されたものと考えられる。此処には鷗外の意志選択はなかったものと見たい。すでに触れた通り鷗外と長瀬の間には役所付合い以外、今の所親炙の度合を付度する資料が全く欠けているからである。けれど渡歐の送別会に石黒と長瀬が出席して前途を祝したことは、運命の戯<sup>いたづら</sup>にしては出来過ぎている。鷗外の口から長瀬時衝に触れた資料として唯一のものがある。「鷗外全集・著作篇第三十三卷、書簡」（昭和二十八年十二月、岩波書店刊）の冒頭にある明治十六・七年頃（三月十二日付賀古鶴所宛）に「（前略）尊大棋ヲ御好被成候事長瀬え話候處一戰試度二付同人宅之序之節御立寄願度ト申居候 勿々不具 三月十二日 林太郎 鶴所君榻下」とある。註に賀古鶴所と長瀬とに触れ「長瀬は時衝、靜石と號し、儒佛に通じ詩俳句を善くす。當時二等軍醫正たり。軍醫監（後の一等軍醫正）にて退職、明治三十四年九月六十七歳にて歿す。」と紹介する。親友賀古の將棋相手として長瀬を選び訪問を促している手紙であった。鷗外は呉將棋を弄ることがなかったが、長瀬氏の好む所を悉って敵手に推薦したのだろう。儒學と仏典に通曉していたことが、何程か鷗外との交流にあったと思われるのだが、遂に長瀬時衝がことは留學中は元より、彼の後半生のなかに一所小倉流謫中に彼の死亡を確認する書簡を賀古鶴所宛に出している以外に全く迹を絶っているのが、不思議と云う外ない。最近、小金井喜美子著「鷗外の思い出」（一九九九年十一月、岩波文庫版）を翻していたら次の一文に逢着した。「その牛込の帰りには長瀬時衝氏のお宅へ寄りました、飯田町の辺でしたらう。やはり陸軍の軍医をお勧めで詩文のお嗜があり、お兄様とはお話が合うのでした。ここでは気安く種々のお話を

なさるし、奥様も歌をおよみになるので優しく話しかけて下すって、お庭の石燈籠に灯の入るまでゆっくりしておりました。」（前掲書、七七頁）とある、識者の教唆を乞いたい。長瀬の死亡について、小倉日記、明治三十四年十月一日の記に「新聞紙傳ふ、九月二十八日長瀬時衛京都南禪寺中歸雲庵に卒し」とあり、十月八日、賀古鶴所宛の書状のなかに「長瀬の死は同病相憐むの情なきこと能はず候」とあつて、流謫の歎を託しているのみであつた。

次は留學中の駁ナウマン論争と仏教についてである。

## 2 駁ナウマン論争と仏教

鷗外は待望の海外留學の途に就く。明治十七年六月七日陸軍衛生制度調査及び軍事衛生學研究のためドイツに留學を仰つけられて、八月二十四日に横浜を解纜。<sup>フランス</sup> 仏船メンザレエ号に乗船出航した。明治廿一年九月八日に帰国するまでの満四年間に渉る留學時代の幕開けである。彼の留學中の姿は「獨逸日記」及び「妄想」「キタ・セクスアリス」「大発見」その他の小説などから窺うことができる。「妄想」のなかの一節に述懐して次の如く云つてゐる。

「自分がまだ二十代で、全く處女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反應して内に嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた時の事であつた。自分は柏林<sup>ベルリン</sup>にゐた。（中略）晝は講堂やLaboratorium<sup>ラボラトリウム</sup>で、生き生きした青年の間に立ち交つて働く。何事にも不器用で、癡重<sup>ちちゆう</sup>といふやうな處のある歐羅巴<sup>ヨーロッパ</sup>人を凌いで、輕捷に立ち働いて得意がるやうな心も起る。夜は芝居を見る。舞踏場にゆく。それから珈琲店<sup>カフェ</sup>に時刻を移して、歸り道には街燈だけが寂しい光を放つて、馬車を乗り廻す掃除人足が掃除をし始める頃にぶらぶら歸る。素直に歸らないこともある。

と生活斷片が報告されている。そして漸く萌した思想上の煩悶の経緯を叙述して云う。

自分は柏林の *garçonlogis* の寐られない夜なかに、幾度も此苦痛を嘗めた。こういう時は自分の生れてから今までした事が、上邊の徒ら事のやうに思はれる。舞臺の上の役を勤めてゐるに過ぎなかつたといふことが、切實に感ぜられる。こういう時にこれまで人に聞いたり本で讀んだりした佛教や基督教の思想の斷片が、次第もなく心に浮んで来ては、直ぐに消えてしまふ。なんの慰藉をも與へずに消えてしまふ。こういう時にこれまで學んだ自然科学のあらゆる事實やあらゆる推理を繰り返へして見て、どこかに慰藉になるやうな物はないかと捜す。併しこれも徒勞であつた。

或るかういふ夜の事であつた。哲學の本を讀んで見やうと思ひ立て、夜の明けるのを待ち兼ねて、Hartmann の無意識哲學を買ひに行った。これが哲學といふものを覗いて見た初で、なぜハルトマンにしたかといふと、その頃十九世紀は鐵道とハルトマンの哲學とを齎したと云つた位、最新の大系統として賛否の聲が喧しかったからである。

ハ) Edward von Hartmann (1842—1906) の「無意識の哲學」(Philosophie des Unbewussten 1869) と「美の哲學」(Philosophie des Schönen, 1887) とは鷗外に大きな影響を与えて翻訳の「審美論」や「審美綱領」の骨子となっているが、インド學、仏教學の観点からすると、むしろ Arthur Schopenhauer, 1788—1860 の學系統承者としてのハルトマンに注目する必要がある。この問題は次章に詳細に触れてみたい。

彼の「獨逸日記」明治十八年十月三十日の記に

「地學協會 Verein der Erdkunde に至る。ロオト氏麻拉利亜地方論を演ず」

とあつて、ドレスデン地學協會の例会に師友ロオトの演舌を聴いたのが地學協會との關係の始まりらしい。今日の専門地理學ではなくて、民俗、歴史、民族を含む広範圍に渉る研究講演会、またドレスデン社交場でもあつたらしい。同年十一月二十七日の記に、

「夜地學協會に至る。ワイス(プロシア海軍副醫官 Weiss) [郎案二十五日の記に「軍醫官ロオト、普魯士海軍副醫官ワイ

スWeissとアウセンドルフ食店 Restaurant Aussendorf に會す。ワイスは曾て東海に航し、再び長崎に泊せりと云ふ。長崎娼婦の寫影を示す。一坐其美を劇賞す。之を見るに、容貌艷麗なりと雖、卑俗の氣鼻を襲ふ。戯にワイスに問ふ。一刻の價幾何と。曰く三十弗<sup>ドル</sup>とあるワイスである」の演説を聞く。朝鮮支那市街の不淨を説くとき、衆皆余を視て冷笑す。長崎投錨の段に至りては、ワイス一語の之を評する莫<sup>な</sup>し。若し余をして席に在ざらしめば、其罵詈<sup>ば</sup>或は測る可らず。」とある。

わたくしは後に滯日數年に及ぶ地質学者エドムント・ナウマン Edmund Naumann (1854—1927) の地学協会での日本についての演説を聞いた鷗外が、憤激懊惱するに到ったのも、單に一ナウマンにあつたのでなくて、極東、東海の旅行者見聞が不当荒唐無稽と印象ずける先蹤者のあつたことが判る。ワイスが長崎娼婦と狎戯したことは彼のピエル・ロチが「お菊さん」に俟つ迄もなく、異郷艷聞の挿話として見過せたらうが、東洋各地の市街衛生状態の体験報告における野蠻野卑の色眼鏡に、鷗外は我慢がならなかつたに違いない。

亦十二月十一日の記に

「夜地學協會に至る。ロオトの演説を聴く。在<sup>アフリカ</sup>亜弗利加洲一等軍醫ラルフ Wolff の書翰を朗讀し、其近情に基きて拓殖地の未來を辯ず。後ロオトと同じく晚餐す。」

その十三日（日曜日）の記も捨て難い。

「午後五時婦人會 Darnengesellschaft に衛戍病院「ガシー」に赴く。婦人會は德<sup>ドレスデン</sup>停府軍醫の妻及許嫁女<sup>いみなづけ</sup>より組織す。數年來此企ありしが、此日始て第一集を催したり。是會は夫婿乃至未婚軍醫等皆<sup>あづか</sup>與ることを得べし。食卓にてロオト起ちて祝辭を讀む。韻語なり。（後略）

そして明治十九年一月八日に地学協會に赴いている。その演題演者について触れる所がない。鷗外はこの会の熱心な会員として認められたらしく、協会演説を勧請されて一月二十九日、協会で講演したことが日記から知ら



れる。

「夜地學協會の招に應じ、日本家屋論を演ず。此夕の演者は余一人のみ。然れども新聞の廣告を見て来り聴くもの堂に満つ。酒を賣る少女エムマEmmaその多く甚れたるを謝す。タラントの志賀も亦來り聴けり。」  
がそれである。

三月六日の日記は詳細を極めている。ナウマンとの論争の端緒が忌憚なく記されている。

夜地學協會の招に應じ、其年祭に赴く。此夜の式場演説は日本と云ふ題號にて、其演者はナウマンEdmund Naumannなり、此人久しく日本に在りて、旭日章を佩びて郷に歸りしが、何故にか頗る不平の色あり。今三百人餘の男女の聴衆に對して、日本の地勢風俗政治技藝を説く。其間不穩の言少からず。例えば曰く、諸君よ。日本の開明の域に進む状あるを見て、日本人其開明の度歐洲人に劣れるを知り、自ら憤激して進取の氣象を呈はしたる者と思ひ玉ふな。是れ外人の爲に逼迫せられて、止むことを得ず、此状を成せるなりと。又其結末に曰く。是にて先づ日本形勢の概略を演じ畢れり。今一笑話を以て結局とせん。或る時日本人一隻の輪船を買ひ求めたり。新に航海の技を學べる日本人は、得意揚々之に上りて海外に航したり。數月の後、故郷の岸に近づきしに、憐むべし、此機關士は機關を運轉することを知りて、之を歇止することを知らず。近海を逍遙して機關の自ら休む時を待てり。日本人の技藝多く此の如し。余は他日其弊を脱せんことを望むと。余はこれを聞きて平なること能はずと雖、是れ實に今夕の式場演説にして、人の論駁を容さず。余は懊惱を極めたり。ロオト余が色を見て我前に至りて曰く。君不平の色あり。何の故ぞや。余を以て觀れば、ナウマンの論は大に日本將來の開花を願ふ意あり。頗る妥當なる者の如しと。余以爲らく、ロオト日本の開明の度を知らず、故にナウマンの言を以て宜きを得たりと爲す。ロオトの有識を以てして猶且此の如し。況んや他人ぞや、と。余の不平は益々加はり、飲啖皆味を覺えず。ナウマン余に相對して坐す。ロオトはナウマンの左に坐す。先づ會長某の演説あり。又其軍醫は起ちて諸國婦人社會の現況を演じ、遂に獨逸婦人の幸福を賀し、貴婦人萬歳を唱へたり。既にロオト立ち遠征の利を述べてナウマンを賞し、次いで遠來の客に及べり。

所謂遠來の客とは余と魯國<sup>ロシヤ</sup>のワアルベルヒとを指すなり。ナウマン答辭を陳ぶ。中に曰へることあり。余は久しく東洋に在りしが、佛教には染まざりき。所以者何<sup>ゆえんは</sup>といふに、佛の曰く、女子には心なしと、貴婦人よ。余は之を信ずること能はず。余の佛教に染まざりしは此が爲なりと。余はこれを聞きて驚き且喜びたり。夫れ式場演説は駁す可らず。酒間の戯語は辯ず可し。今他を談笑の下に屈するときは、以て今夕の恨を散ずるに足らん。余はロオトに發言を請ひしに、ロオト直ちに會長に告げ、會長も亦諾したり。余起ちて演説す。其大意に曰く。在席の人々よ。余が拙き獨逸語もて、人々殊に貴婦人の御聞に達せんとするは他事に非ず。余は佛教中の人なり。されば貴婦人方は、余も亦此念を爲すと思ひ給ふならん。余は辯ぜざることを得ざるなり。夫れ佛とは何ぞや。覺者の義なり。經文中女人成佛の例多し。是れ女人も亦覺者と爲るなり。女人既に能く覺者となる。豈心なきことを得んや。貴婦人方よ。余は聊か佛教信者の爲に冤を雪<sup>すす</sup>ぎ、余が貴婦人方を尊敬することの、決して耶蘇教徒に劣らざるを証せんと欲するのみ。請ふらくは人々よ。余と與に杯を舉げて婦人の美しき心の爲に傾けられよと。語未だ畢らず、一等軍醫エエルス<sup>Ehlers</sup>は其夫人と余の傍に來りて曰く。荊妻婦人の代表と爲り、君の演説を謝すと。其他一等軍醫バアメル・キルケ等皆余が演説を賞す。余の快知るべし。ロオト笑を含みて曰く、*Immer verschmitzt!*（如例點<sup>こうれつめが</sup>）と。（中略）後ワアルベルヒ志賀、松本と此夜の事を語る。ワアルベルヒの曰く。諸君は森子に謝せざる可らず。森子は談笑の間能く故國の爲に冤を雪ぎ讐を報じたり。駁したる所は些細なれども、人をして他の議論の多く此の如く妄誕なるべきを思はしめたり、是れ全日本形勢論を駁したるに同じ、と。

ナウマン氏の閱歷について簡単に触れたい。「日本地質の探究―ナウマン論文集」（山下昇訳、一九九六年九月、東海大学出版会刊）に要領の好い紹介があるので引用する。

「日本に初めて近代的な地質學を導入した、ドイツの地質・地震學者で、日本の地質をまとめヨーロッパに紹介した。ドイツ・ザイセン王國マイセン市に生れる。ミュンヘン大学で地質學を學び、一八七四年學位を得る。日本政府から東京開成學校（東京大学の前身）の鉱山学科に招かれたが、一八七五年（明治八年）來日するとき、鉱山学科は廢止されていて、金石

取調所で和田維四郎と鉱物の調査に当った。一八七七年（明治十年）に東京大学の開設に当り日本で最初の地質学採鉱学科の教授となり、多くの後進を育てた。一八七八年日本政府に進言して内務省地理局に地質課（現在の地質調査所）を置き、翌年東京大学から同課に移った。その後全国の地質調査計画を立案、一八八五年（明治十八年）に退職し帰国するまでに自ら東北・関東・四国地方を始め各地を踏査し、独創的な論文を多く著した。同年ベルリンで万国地質学会議が開催され、自ら指導調査した日本の地質をまとめた『日本群島の構造と起源について』を出版した。日本への近代的地質学の導入・地質調査事業に果した功績は大きい。／一八八七年、日本列島中央部を横断する大きな溝状の地帯を『フォッサマグナ』と命名した。本州を通じて走る『中央割れ目帯』（西南日本のものは後に中央構造線と呼ばれた）による内・外帯の区分など、日本列島の地体構造区分の研究は、日本に大きな影響を残した。また日本の旧象化石<sup>マンモス</sup>についてまとめドイツの雑誌に発表している。その中に記載されている横須賀産のものはナウマンを記念し、横山次郎によってナウマンゾウと命名された（一九二一年）。ナウマンは自説の日本群島構造論だけでなく、日本の文物の紹介にも努めたが、好意的な紹介ではなかったため、当時ドイツに留学していた森鷗外と論争になるなど、日本国内ではその業績が今まで正当に評価されなかった面が多い。としている。

わたくしは此処でナウマンに同情を禁じ得ない。鷗外日記のその日の記述には故郷の文明開化を非謗する西歐人に対する、特更な挑戦を敢てした自負矜持が見られる。講演の末尾に放って聴衆の俗耳に入り易い珍談軼事は、その資料見聞のいかなる事例に依ったか知り度い所である。幕末の日本海軍事情を悉る要がある。外国お雇い教師の一人オランダ人のカッテンディーケによる「長崎海軍伝習所の日々」（水田信利訳、昭和三十九年九月、平凡社刊、東洋文庫26）を瞥見してみよう。伝習所の生徒について次の様に云う。

「私には何を標準に生徒を選択するのか、よくは呑み込めなかった。日本当局はあまり生徒の能力といったものに頼着しないで、ただ門閥がものを言い、一切を決定するらしいから、どんなに馬鹿らしくても、どうにも仕様がなない。（中略）我々

は四十人の旗本出身の生徒に、あらゆる航海学の教育を施したが（中略）少くとも何事も大綱だけは、一と通り教わっておくべき筈なのに、いつも『拙者は運転の技術は教わっているが操練はやらない』とか、あるいは『拙者は砲術、造船及び馬術を学んでいるのだ』という風で、勝手気儘な考えで勉強しているのだ』（前掲書、五四頁）と。

当時の海軍生徒が旗本の子弟であつて、軍艦の運転操法を仕事師下人のすることと軽蔑していた風潮はあつたろうこと当然であつた。宛かもデユカの交響詩「魔法使いの弟子」の如く、始動させることができて、停止させる術を知らず外洋を彷徨したとする軍艦乗組員が居たとする軼事は、カッティンダイケの記録には見えない。むしろ彼は幕府が勝麟太郎と日本人乗組員だけで帆走スクーネル船鵬翔丸の長崎から江戸迄の回航と長崎への帰港について述べ

「私はこの旅行で大いに得る所があつた。また生徒らも、この航海によつて船を動かすことの、いかに難しいものであるかを實地に覺えた点において、非常に役立ったと思つてゐる。」（前掲書八一頁）

とあつて運転知識の指摘されるような不祥事は窺われない。また

「観光丸（外輪汽船スームビング）は艦長格の矢田堀指揮下に、第一期伝習所生徒に操縦せられて、突如長崎港に入港し、外国人一同をびつくりさせた。その入港ぶりたるや、よほど老練な船乗りでなければできない芸当である。船と船との間に錨を卸したりする大胆不敵な振舞いをやつてのけた。彼らは測り知れない自負心を持つてゐる。」（前掲書二三三―三四頁）とあつて、ナウマンの言を嘲笑するが如き記事で一八六〇年（万延元年）の出版だから、海外の一部では周知の書であつたろう。わたくしは更に日本側の史料として、有名な勝麟太郎海舟の筆になる「海軍歴史」（『海舟全集』第八卷、昭和三年四月改造社版）海軍伝習の記事を検したが、先の軼事の片鱗も見られなかった。

森鷗外が激怒するのも尤もな言辞としか云いようがない。ナウマンに不平の色が顔面にあるのを察知した鋭敏

な感性は、先のワイスの演説中に散見する東洋ないし日本への偏見の罷り通るのが恕せなかったのだろう。そして酒間戯語のナウマンの言質を捉えて反撃に移った。「仏教女子非成仏論」に対する痛快極まる反論である。この地学協会の年祭にはドレスデン婦人会の主要なメンバーが夫君らと共に臨席していた。ナウマンはこれら婦人たちに迎合する意図があったろうこと当然である。当時のプロテスタント派キリスト教会とその信者たちの動向を悉る一端が、わたくしの眼を射たのによっている。渡邊海旭先生の「歐米の佛教」（大正七年十一月、丙午出版社刊）に曰く。

「見よ、佛教と世界思潮とは今如何なる關係であるか、古き所でシヨウペンハウエルが印度思想を情ひ來りて、歐州哲學史の新生面を開きたるは云ふまでもなく、藝術の方面に及びて大詩聖ゲーテが印度名曲シャクンタラーを嘆賞し其一代の傑作ファウストの構造が全然梵土戯曲の製作法を加味したることも人の知る所、ハイネの詩中に大史詩マハーブハーラタの譚を取るなど、印度思想が歐州に侵染すると共に、佛教教義は此所に彼所に種々の影響を與へ、シヨウペンハウエルに哲學的基礎を得た大樂聖リヒヤード・ワグネルは其樂界革命の大業を成就する傍ら、佛教の研究に力め瑞西に『トリスタン』を起稿する際、キヨツペンの名著『佛陀の宗教』——（一八五七年）安政四年版——を耽讀した感想を其意中の人エーゼンドク夫人マチルデに書き送つて居る。ワグネル晩年の大作に佛教色彩が著く映るのも偶然ではない。實際信仰の方面から見ると獨逸建國當時鉄血宰相ビスマークが才幹ある人として讚美重用した普國プロシヤの高等官テオドル・シユルソエは『未來の宗教』を書いて堂々基督教の凋落を論斷し、之に代るべきものとして、吠檀多ヴェーダントの哲理と佛教の實行とを結合して新宗教を立つべきを大膽に告白した。これは今から四十年前の話であるが、此傾向は佛教研究の發達と共に益増大し來り（中略）ベルグソン哲學の背景には臆氣ながら佛教主義が認めらるゝことは、識者は大抵認めて居る。而して『カントへ復かへれ』といふ哲學界の呼號は、今や漸く『佛陀へ佛陀へ』との兆候すら見へる。斯かくて實際信仰としての佛教の要求は、豫想の外に大きく佛教に關する新刊書は英獨佛とも通俗ものが斷へず書店に出るのだから、この大勢に備ふる軍略として基督教家が佛教研究の盛なるは驚くべき程で、

随分酷烈な攻撃的批評の著作も屢書物屋の店頭に現はれる。マックス・シュライバルの書いた小冊子『佛陀及婦人』は此一例とすべきであつて、思ひ切つて佛教の婦人虐待を論じ、其文明價值を冷酷に批評して居る。其督教徒にありては實に思ひ付きの書物であらう。（前掲書、八一—一〇頁）

海旭先生の紹介せられたマックス・シュライバル著『佛陀及婦人』について、その原文標題、發行年月日、版元を知り度い所であるが、わたくしの未見で、佛教學大學院大學圖書館にも架藏されて居らず残念である。先生指摘の如くプロテスタント派貴婦人らは、これら通俗の仏教攻撃の書、なかでも男女同權と婦人地位の昂揚を企図し活動する彼女らにとって、「婦人に心なし」とする仏教に憎惡の念すら懷いていたろうこと、推察に余りある。ナウマンはこの風潮を熟知していたと見たい。彼自らもプロテスタント信者であつたろう。そしてこれに反撥した森鷗外もこれらの書を嗜読していたかも知れない。一方では東洋の叡智の結晶として澎湃と一部の知識人学者、藝術家に押寄せた、インド学・仏教学への研究書のあつたことも鷗外は悉つていた筈である。地学協會年祭の式場講演と、その後の宴席での雰囲気はこうした状況であつたと見たい。とするとナウマンの仏教学經典での知識の程度は、マックス・シュライバルが小冊子の尻馬に乗つてのもので、決して論據の確な基礎をもつていなかったに違いない。留学以前の鷗外の閲藏の知見は既に見てきた通り、長瀬時衝氏との授受があつたことの消極的な面であつて、後の九州流謫の間の積極性はなかつたと見て誤りあるまい。仏教における「女人成仏」については、妙法蓮華經提婆達多品第十二のなかにサーガラ龍王の娘の成仏を説く條があり、吾が聖德太子が三經義疏の一つに選ばれた「勝鬘經」（「勝鬘師子吼一乘大方廣經」）に勝鬘夫人の女人成仏が説かれていて、多少仏教に関心があれば女人成仏の存在を知悉できる。

彼のマックス・シュライバルと同様な標題で女人成仏について詳細に涉つてゐる佳什がある。岩本裕先生の「仏教と女性」（一九八〇年九月、第三文明社刊、レグルス文庫123）である。その前編に「仏教の女性觀」として、

初期經典にみられる女性観とその背景を、次に大乘仏典に見られる女性観について縷々説明して居られ、読者の嗜読を薦めたいと思う。そのなかで先生は曰う。「女性の地位の高かったヴェーダの時代」として

「多くの祭祀および宗教儀式は婦人に開かれていた。特に、家庭祭祀は妻女の関与なくしては執行されなかった。結婚式には讃歌を咏い、供物を捧げ、また場所と時間と家庭によって異なる慣例について夫の手つだいをしなければならなかった。また農耕に関する祭祀にも参加した。初期においては、夫と妻は家財の共同所有者であつた。」（前掲書、一〇頁）と。

しかしながらヒンドゥー社会が成熟するに従つて女性の地位は転落して、

「ブラーフマナ文献において、女性は或る意味では徹底的に侮辱される。（中略）『マハーバータ』などの記載によると、女性は本質的に邪魔であり、精神的には汚れており、女性がいるだけで周囲を汚染し、解脱の邪魔になる。（中略）女性の蔑視は『マヌの法典』（二〇・六七）における『女を殺すことは、穀物や家畜を盗んだり、酔つた女を強姦するのと同じく、微罪 upapataka である。』という言葉に極まるであろう。」（前掲書、一二頁）

といった社会になる。そしてその社会改革者としての身振りをもつゴータマ・ブッダ、仏陀が実践論理の徳目を引携げて登場する。先生はこの点からブッダの女性観を次の様に要約せられた。

「このようなヒンドゥー社会のなかにはぐくまれたブッダが、女性に対して、どのような考えを持ったか。仏教における女性観の根源をここに発することは今さら言うまでもない。（中略）さて教典の記載によると、ブッダの女性観は截然と二つに分かれる。すなわち出家者に対する場合と、俗人に対する場合とである。そして後者の場合にはブッダはまさにフェミニストぶりを発揮するのに対し、前者の場合には女性を不浄視し、女性を蔑視するとともに、特に尼僧に対しては後述するように出家に際して受ける戒（具足戒）を僧より多くし、従つて律における処罰事項の数も多くなつており、更に具足戒を受けるに際して八つの條件を課しているのが実状である。」（前掲書、一七頁）

と。

「女性に心なし」とするヒンドゥー教社会のなかで熟視諦観した仏陀が、こうした二面性をもって行動した点の指摘は甚だ重要であると思う。しかも、即身成仏よりも変生男子となった上での女人成仏を説いている点、法花経のサーガラ龍王の娘の成仏を見れば、複雑な社会の投影の一部が垣間見られるわけである。

こうした問題を踏えての、ナウマンと森鷗外の論議應酬はなかなか面白い側面をもっていると言わなくてはなるまい。両者女権伸張に燃える貴婦人方を相手としてフェミニスト振りを発揮したのだが、ナウマンの仏教女性観に女性蔑視の翳を捉えて敷衍したのに対し、鷗外は仏陀の覺者さとしものの意義から説いて、仏陀のフェミニストたる女人成仏の諸例から押して、吾も亦仏教徒なり、フェミニストたりとして、美しき覺者の心をもつる貴婦人に祝盃を挙げ酒席の演舌は鷗外の勝利に終ったことになる。ここには鷗外の縦横な機智と当意即妙ブラジニヤの智慧の発露があつて、歸朝後の啓蒙的論戰のなかに遙曳しているのが感じられる。

講演後にナウマンはLand and Volk der Japanischen Inselkette. (日本列島の土地と民族) を発表、更にミュンヘン總會の要旨も発表せられた。これに対する鷗外の文章による「日本の真相」Die Wahrheit über Japanの論難と、それに対するナウマンの反論、亦鷗外の再説の逐一については、澤柳大五郎氏の「鷗外の駁撃ナウマン鳥問論」と「鷗外問答」(『新輯鷗外劄記』(平成元年八月、小澤書店刊、所收、九〇七〇頁)を参照されたい。鷗外ドイツ文の訳文を中心に細密な論譯点の紹介と批評、亦ドイツ学者L先生の評とその読後印象が綴られていて、日本文化論、比較文化論として興味深いものである。そして後者のなかで、

「先生がわたくしの期待してゐたのとは全く殊つた印象を其れからお受けになったことを知って、わたくしは意外に感じました。日本文化と西歐文化との相關を問題にしてゐる同一の論議に關して、西歐人と日本人とが斯くも殊つた見解を有ち得るといふことは、わたくしには大きな問題であると思はれます。」(前掲書、五三―五四頁)



と述懐されている。ここにもナウマンと鷗外の見解のギャップを、それ程重視しない西欧人の一般見解が覗かれて面白い。しかしこの問題に深入りすることを避けたく思う。それは別の機会に譲って仏教についてのみ触れよう。

鷗外は「日本の真相」のなかで宗教と傳説として、

「佛教に關するナウマンの記述は大體に於いて正しい。併しその際の彼の物の言ひ方にはわれわれは心平らかであり得ない。例へば聖書から區々たる點を引き出してこれを笑ふべきものとする程容易いことがあらうか。佛教上の傳承に關しても事は全く同じい。／人も知る如く佛教の精髓は凡神論的虛無説である。佛教は現世に何等完全なるものを見出さない。より高い境界、彼岸に之を求める。この彼岸に向ふ憧憬こそあらゆる宗教の交叉點である。佛教の凡神論も亦この凡て現世のものを空と爲す觀照に通じてゐる。佛教は森羅萬象の裡に神を認める。草木さへ、地さへ之に依つて魂を與へられてゐる。それでもナウマンは佛教徒は魂なきものと考へてゐると主張し得るであらうか。更に基督者と等しく佛徒に於いても、その宗教修行の上に幾多の段階位級のあることを看過してはならない。佛教の中にも、淨土、地獄、輪廻等をたゞ象徴的に、つまり單に意識の作り成したものに過ぎないと説く宗派がある。」（前掲・澤柳氏訳文、二一―二三頁）と。

ナウマン氏の仏教經典及び仏教學の知識がどの程度であつたのか、鷗外は大体に正しいとしているだけで深い穿索を試みていない。当時のプロテスタント側の仏教攻撃通俗冊子の域を出なかつたとするのは酷に過ぎよう。後に彼は日本のお伽噺・説話の一つ「竹取物語」を元に創作オペラ「神の啓示」―日本の昔話「竹取物語をもとにして―」三幕を著作している。一九〇一年（明治三十四年）のことである。地質學者地震學者たる彼が、オペラ作品を遺している上、訳者の解説によると

「日本の古典『竹取物語』を下敷にしたオペラ作品、原題のGötter Funkenは直訳すれば「神々のひらめき」といったよ

うな意味で、ベートーベンの『第九交響曲』の第四楽章の合唱で繰り返えて唱われるFreunde Schöner Götter Funken Tochter aus Elysium……の言葉」

とあり、また「原文一ページ（図参照）の登場人物の右上にある手書きの書入れにはナウマンによるもので、その大意は次のようなものである。／全ての創造物は、滅びる運命にある。／なぜなら、死と生に、創造物は支配されているのと同様であるから／もし、それが、死と生より／いつか自由なる時があるとすれば／それは眞実の幸福―涅槃<sup>ニルヴァナ</sup>―であろう。／聖なる經典より。」（前掲・山下昇訳「ナウマン論文集」三五六頁）を注目するが好い。これこそ過去仏所説の四偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」のインド語書込みなのである。ナウマン氏は一方でシラーの歡喜の歌より標題を採りながら、他方オペラの眞髓を四偈句で道破している。鷗外論諍より十五年の後に、かつての曾遊の地日本の昔噺「竹取物語」に題材を元に、樂劇曲を書いたことになり、彼の仏教知識の一端がこうした形で実を結んだ。この「竹取物語」の題材の溯源については幸田露伴学人が、

「竹取は物語類中で先づ最も古い。此類の談は風土記にも靈異記にも有るやうな種類の談で、何處の國にも存しうなものである。田中大秀が古注を集成してゐるが、古くからの説の範圍を出ない。華陽國志だの、寶樓閣經だの、奈女耆婆經だのを引いて、これ等から出たといふやうに云つてゐる。それはたゞ一可似てゐるところがあるといふまでだ。自分は二十年ほど前に發表したが、古説の如くにそれらの書が物語の種子となつてゐるといふのならば、それよりも月上女經の方が猶ほよく赫奕姫の譚に肖てゐると云つたのである。（中略）物語の全體に於て、男達が大騒ぎして戀に迷ふこと、女が上天すること、月日の點まで同じき月上女經を引き忘れたのは至らないことだ。赫奕姫といふのが第一月上女のことを暗示してゐるといふのだ。」（『支那文学と日本文学との交渉』露伴全集第十八卷、研究・昭和二十四年十月、岩波書店刊、五五―五六頁）と指摘せられた。大正新修大藏經第十四卷經集部一、四八〇「佛說月上女經二卷―隋・闍那崛多譯」に収載されている經典が據り所となつてゐる。面白いことに「竹取物語」が一八九八年（明治三十一年）イギリスでデイキ

ンズの手により英訳がなされ、その書評を南方熊楠翁が綴っている瑣事がある。ナウマン氏もこの英訳を或いは嗜読参照にしたかも知れない。

わたくしはナウマン氏のこうした事蹟の一端を悉るに及んで、鷗外との確執・蹉跎が誇大視せられて謂れなく過少評価されているのを悲しむ。昨年わたくしは高知市に遊び、ナウマン氏の研究がこの地に及んで足跡を多く遺しているのを悉った。彼のお雇教師としての日本政府の所遇は過少に過ぎたのではあるまいか。地震国日本としてはこの地質学者に地震研究所設立についても最大の敬意と尊重とを払い諮問を受けるべきだったと思う。地球物理学者寺田寅彦以前に地震と地質について最も知悉する学者に対して、わたくしは山下昇氏と共にもっと多く推重することを提言したい。ナウマン氏は決して日本の開明を願わなかったのではない。富永仲基先生の喝破した外国文物受容の際の「絞・質」の態度が、この地質学者・地震研究者に対して多くの失望感を与えたと考えられる。彼は決して仏教理解の度も一般人よりは卓越してはいないはずはない。ヨーロッパ・ドイツの仏教学研究の姿に風馬牛であつた筈はない。当時のそうした風潮の逐一は渡邊海旭先生の「歐米の佛教」第一章パーリ語聖典の研究、第二章梵語佛教聖典の研究を嗜読すれば悟る所があるうと思う。その一節に曰う。

「通俗講義に通俗書を紹介するのに不都合もあるまいから、今少し通俗の好著を出して如何に佛教研究が歐米の普通知識となりつつあるかを證しよう。前にも申した通りカトリック基督教の學僧エドモンド・ハーデー師Edmund Hardyはパーリの造詣侮るべからざるものがあつたが、さすが硫石の坊さん丈に通俗の好著も乏しくない。小冊子ではあるが一九八〇年のBuddhismus nach alteren Pali Werken (古パーリ著作によりての佛教)や一九〇二年の阿育大王傳(『性格描寫の世界史叢書』中)や、一九〇三年ギョツシエン叢書で出した『佛陀』などは、何れも獨逸語の讀者に歓迎さるべきものだ。獨逸語の通俗書としては更に故ビッシェル教授の『佛陀の一生及教義』(自然と精神界から叢書一九號)を薦めたい。是も頗る上乘の書だ。」(前掲書、六五頁)

と。そしてわたくしも若年の砌仏教研究に志して、和辻哲郎博士の「原始佛教の實踐哲学」（昭和二年一月、改訂版昭和十七年三月、岩波書店刊）を嗜讀した折に参照併讀したのが、オルデンベルク著「仏陀・その生涯・その教理・その教団」であり、ルイス・デヴィズ著の「仏教的インド」「仏教」であつた。これらに就いても海旭先生は云う。

「次にはラルデンベルヒの佛陀、其生涯、其教理、其教團 Buddha, Sein Leben, seine Lehre, Seine Gemeinde」初版は一八八一年に出て爾來九〇年に第二版、九七年に第三版を出し、今や第五版に達した。第一版の翌年出たホイーWilliam Hoeyの英譯も亦三版を重ねた。此丈でも此書の價值は充分に分らう。パーリ佛教の原材を巧妙且つ周到に運用整理して獨特の秀麗な文章と精確な理路とで最も美しく纏めてある。唯此書に惜む所は基督教の偏見がちらちら見ゆることであるが大體に於てパーリ佛教の傑作として上乘のものであるは學壇の定論である」（前掲書、六一頁）と。

この冊子は、当然ナウマン氏の熟讀を患わしたに相違ないと考えられる。先のEdmund Hardys König Asoka Indies Kultur in der Blütezeit des Buddhismus, mein, 1902. Weltgeschichte in Charakterbildern, 1. Abteilung: Altertum. は後に大村西崖氏と鷗外が共譯した「阿育王事蹟」（明治四十二年一月、春陽堂刊）の原本である。

鷗外が小倉左遷から東都に帰還後の所謂「豊饒の時代」に、ナウマンのオペラ曲「神の啓示」執筆の消息を悉っていたら、恐らく誤解を解くことを得たかも知れない。お雇い外人として、モースの如くダーウインの進化論を説き、大森貝塚の発見と発掘、更にはJapan day by day. 「日本この日／＼」（石川欣一訳昭和四年十一月、科学智識普及會刊）に多くの讀書子の関心を集めた人物や、チェンバレンの「日本事物誌」の如く、かなり辛辣の評があるにもかかわらず、多くの、日本人の尊崇を瀦えたのに比較すると、ナウマン氏の立場は氣の毒だったと云わざるを得ない。

### 三、小倉時代の鷗外の仏教学とインド学

明治二十一年九月八日横浜に帰着し、十二月末に陸軍軍醫学校教官兼陸軍大学校教官衛生會議事務官となり、文壇の啓蒙に乗出す時代が到来した。「しがらみ草紙」による翻譯や小説戯曲の批評、美術評論による論戦を敢行し、雅文体小説三部作を執筆して作家の地位を獲たのも明治二十三、四年の砌である。すでに海外留学中にドイツ文学を中心に旺盛な読書力で渉獵していた様子は、獨逸日記明治十八年八月十三日に

「架上の洋書は已に百七十餘卷の多きに至る。鎖校依來暫時閑暇なり。手に随ひて繙閱す。其適言ふ可からず。邊胸決眈の文に希臘の大家ソフォクレス、オイリピデース、エスキュロス、Sophokles, Euripides Aeschylosの傳記あり、穠麗豊蔚の文には佛蘭西の名匠オオネエ、アレキイ、グレキルOhnet, Halevy Gnevilleの情史あり、ダンテDanteの神曲Comediaは幽昧にして恍惚、ギョオテGoetheの全集は宏壯にして偉大なり。誰か來りて余が樂を分つ者ぞ。」

とあり、やがてハルトマン哲学の庇を窺うに到った。亦明治二十年十一月九日の記、

「井上巽軒の佛教耶蘇教と孰れか優れると云ふ論を聞く。大意謂ふ。佛の如來には人性なし。耶蘇の神に優れり。佛の大乗は因果を説く。而して重きを後身に歸せず。其小乗との差此に在り。耶蘇の未來説に優れり。佛は覺者なり。耶蘇の神子と稱するに優れり云々。余問ひて曰く。今哲学には定論と認ざる者なきに似たり如何。曰く凡そ萬有學に根する者は皆今日の哲学なり。其他フェヒネルFechnerの心理Psychologie、カントKantの道德Ethik皆定論なり。」

とあるのに徴しても、当時のドイツ中心の仏教学インド学研究と、当時の哲学界の趨勢に関心があつたことが分る。亦明治二十一年四月一日に転居して室内を叙して云う。

「書架は廉價なる故購ひ求めたる私有物なり。新たに獲たる奇書を挿列し、時に意に適する簡冊を抽いて之を讀む。以て無聊を醫するに至る。」

と。

「目不醉草」<sup>めふましぐさ</sup>に明治三十一年（三十二年に涉り、Volkert; Aesthetische Zeitfragenの梗概を「審美新説」として纏め、Eduard von Hartmann; Philosophie des Schoenenの大綱を訳述して、共編者無記庵大村西崖と共訳の形で「審美綱領」（明治三十二年九月、春陽堂刊）として上梓した。共編者大村西崖に関しての履歴は、國史大辭典<sup>2</sup>、（昭和五十五年七月、吉川弘文館刊）の谷信一氏の一文に詳しい。

「大村西崖」<sup>おおむらせいがい</sup>一八六八—一九二七、明治・大正時代の東洋美術史家、本姓名塩沢峯吉、明治元年十月十二日駿河国富士郡加島村に生る。同二十五年（一八九二）東京美術学校彫刻科に在学中同郷の大村家の養子となった。翌年彫刻科の第一回卒業生となったが、在学中から仏教美術と漢学に秀でていたため、卒業後もその研究に従事して彫刻家たることを断念したが数点の作品が残っている。二十九年に東京美術学校助教授に任ぜられて、主に東洋美術史を講義し、三十五年教授に昇進してから昭和二年三月七日に六十歳で没するまで在職した。助教授時代から仏教学と東洋美術史の研究論文を発表しているが、（中略）『東洋美術大観』十五冊（審美書院刊）、（中略）正倉院御物の図録なる『東瀛珠光』五冊を始め大図録類を編集発行しており、中国に留学して名著「支那美術史彫塑篇及附図」を著し、大正七年（一九一八）刊の『密教發達史』五巻は帝國学士院賞を受けている…（以下略）

とあって、鷗外が東京美術学校で美術解剖学、審美学を講じた折親炙したと思われる。西崖氏の仏教学及び仏教美術と東洋美術史の造詣は、種々の意味で鷗外に刺戟を与え影響する所多大であったに違いない。「審美綱領」の原版に彼の次の如き漢文序があり、その仏教学の蘊蓄の一端が吐露されている。すなわち、

「原夫一多相容、無相而非實相、同時具足、無因而非圓、因岳瀆俱、轉無上大法輪、鱗毛普現法身三摩耶、若夫海印定中炳、現因陀羅網相、一境界裡、窮盡所具、因緣果自非妙觀察智、詎能透得秘底、審美雖固、局一法宗、因偵相應全理、本迹必雙融、彼此自夷齊難哉、統攝包含使物無不罄、籠羅該括致事有所歸、是以住哲詮量、衆賢鼓吹、旁徑委它、異部紛綸白道尚隱

沒鐵塔、無由闢精藝之胎藏、雖法爾備具美学之全界、未成曼荼、西國論師訶棲兎曼、覈論古今宗輪廣說、工巧法相、亂麻條然、服其治法群疑斷乎、得此決案諸院不亂、位九會列於序所立、雖有較似僧傳論師之執、計談理多同歸於相宗大乘之玄旨、寔極諸法建立之精致、能契萬象解釋之勝諦、東方化身開士鷗外、求法請益講敷顯揚斯土、始全的傳藝苑、忽得律染、今依所涌出、茲審其澄詮、採彼多言述此綱領、簡文正攝深義、小冊妙期總持、云爾、無記庵主」

と四六駢儷体の漢文の妙旨を以て伝えている。

この著者Edmund von Hartmannの美学説を鷗外が訳述したには、次の様な立場からであつた。それは明治二十九年の「月草」の序に、

「己は嘗て我國の藝術的批評に手を下した時、此種の審美問題の最完備して居るハルトマンの審美學を選んで根據とした。或人はこれを見て苟くもハルトマンの審美學を以て根據とする以上は、その哲學全系統をも信ぜねばならぬと云つた。然し己はハルトマンの無意識の研究に充分の重みのあることを認めるとはいひながら、其全系統を城廓にしてそこに安坐する積でもなければ、又其審美學の形而上門を悉く取り出して切實にする積でもない。(中略) ショオペンハウエルの言に、哲學で家を成した人は、網を張つた蜘蛛の様なものだといふことがある。その網は即ち哲學系統で、その網の主人たる蜘蛛が、外の蜘蛛に近づくには、争闘の目的より外に目的はない。ハルトマンの網として居る無意識哲學は、一時或人が第十九世紀は鐵道とハルトマンとを生んだと云つた程盛に行はれた。併しハルトマンの流行はその無意識論に止まつてゐて、その審美學は餘り世間の注意を惹いたものではない。その審美學は本人のスツジエン・ウント・アウフゼツチエ 著の外には、これを實地の藝術的批評に應用して見たものも殆無い。今はハルトマンの流行の一面は既に過去に屬して、その次に流行つたニイチエの人間以上の人間主義さへそろ／＼下火になつて居る。(中略) それであるからハルトマンの審美學は、特にその形而上門の偉觀をなすのみでなく、その單一問題に至つても目下最も完備して居るのだ。」(鷗外全集第二十三卷、「月草叙」昭和四十八年九月、岩波書店刊二九八頁)

と云っている。そして、

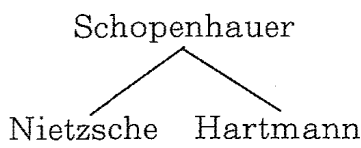
「それだからその審美學からは、第十九世紀の文學美術を見ても、自然派の中の存活の價值のある側は、その頗る進歩した具象理想主義で包容して居る。進んで新理想派の製作はどうかといふに、たとひ技巧上に昔の所謂理想派に殊なるところがあつても、自然派の遺物と見られる分子が残つて居るところがあつても、固よりこれを包容して餘あるのだ。こゝに出て一つの網を張るには、シヨオペンハウエルとロッツェとの血脈を引いて居る形而上派のハルトマンなどをば土臺から動かし、生理學者から化けた經驗派のウンドなどをば藥籠中の物にして、新しい哲學が成り立つやうにせねばなるまい。」（前掲文、二九八―二九九頁）

と。  
「月草」は明治二十九年十二月に春陽堂から發行され、当時の美学、哲學についての鷗外の思索の跡を辿る便宜な道案内の一つであつた。翌年月不詳の賀古鶴所宛書簡に、

「近日入澤達吉来訪、獨逸哲學上新著述澤山借入おもしろく候。就中Friedrich Nietzscheは餘程へんなる哲學者に候、小生の今迄讀居たるHartmannとも關係あり尤Nietzscheハ已ニ發狂セリ。

人類一同に取りての智識の充分發達したる上にて世界の自滅ありとするもの

智識の發達は少数人物のみありて此人間以上の人物は何をしてもかまはぬ（善も惡もないとするもの）とするもの随分妙に思はれ申候」（鷗外全集著作篇第三十三卷、書簡、三六―三七頁）



ハルトマン、ニーチェがいずれもシヨウペンハウエルから出ていると認識していた点、「意志と表象としての



哲学」と「無意識の哲学」の系譜を熟知していたに違いない。

鷗外がショウペンハウエルをどれだけ閱讀し関心をもっていたのか、わたくしは頗る悉りたく思う。鷗外のインド学・仏教学の知見のバロメーターになるからである。故三井光彌氏の「獨逸文學に於ける佛陀及び佛教」（昭和十年二月、第一書房刊）は、比較文学・比較文化の視点に立った佳什であり、示唆する所が多い。第一章、三のショープンハウエルと佛教の節は、インド思想・仏教思想と彼との交流・成果について詳細な叙述からなっている。その一節に云う。

「ショープンハウエルの哲學が一般に認められることは頗る遅った。彼の主著『意志と表象としての世界』（Die Welt als Wille und Vorstellung）が一八一九年に世に出てから彼が『發見』されるまで三十年の歲月が流れた。然し一度その機運に逢着するや、流暢にして魅力ある文章を以て書かれたこの獨創的な意志と生命の世界觀及び人生觀は、頗る世人の好尚に投じて追々に汎く讀まれ、彼の死後二十年を経たる一八八〇年代の世界苦と厭世觀の時代に至つては、正に『流行』の絶頂に達せる觀があつた。それと同時に佛教も亦學的に盛んに研究され、藝術品の題材ともなつて、ザンサーラ、ガルマン、ニルヴァーナ等の梵語やパリー語が、一般の書物にも殆ど普通の獨逸語の如くに何等の註釋無しに用ゐられるまでに、印度的佛教的思想は普及した。いづれの方角から見ても獨逸佛教に對するショープンハウエルの影響と貢獻といふ物は、想像以上に大きい。」（前掲書、五一―五二頁）

三井氏は更にニーチェと仏教の項目を設けている。これらの文章と渡邊海旭氏の『欧米の佛教』を併讀するならば、文学世界のみならず哲学思想界へのインド学、仏教学の影響の瀾漫せるのを知悉するであらう。三井氏の逐一の指摘を紹介したいのだが今は先を急がなくてはならない。

わたくしは鷗外の小倉左遷時代を願望するに當つて、聊か彼の留学中から帰朝、「柵草子」「月草」「目不醉草」時代の活躍中に影響を享けたハルトマンからショウペンハウエルの背景を細叙し過ぎたかも知れない。彼が小倉

に在つて閲藏の棧会や梵語習得の事実を、小倉日記、書簡、また小説「二人の友」「獨身」などから窺つてみたいと思う。

明治三十二年（一八九九）十一月、（日不詳）母堂峰子宛の書状に

「植物名彙、魯國字書は未着に候（どれも多分不日着候事と存居候）、この頃は梵語<sup>サンスクリット</sup>と魯西亞語<sup>ロシア</sup>と佛蘭西語とを研究することといったし候處梵語は始よりの事なればでクリ坊主（注、於菟の愛稱）の獨逸語をやると同じ位のものにて可笑しく候梵語は書物にて獨学…」

とあつて、サンスクリット語の獨習を始めた様子が知られる。フランス語は小倉在住の宣教師ベルトランの許に通つたが、ロシア語も獨習だつたろう。鷗外がサンスクリット文法書をどの様な入門書に據つたのか知りたいが、吾々が一九五〇年代初、東大で辻直四郎先生から手ほどきを受けた折、荻原雲来「實習梵語学」をテキストに用いられて、文語体文章故に常にマクドウェル著「学生のためのサンスクリット文法」A. A. Macdonell; A Sanskrit Grammar for Students, Oxford U. P. 1927. Rep. 1950 を参照せられた。わたくしの手許に Bühler; Sanskrit Grammatik, wien, 1882 の小冊子がある。鷗外の獨習書はこうしたドイツ語文法だったかも知れない。そして十一月十九日大村西崖宛の書簡にも

「頃日『サンスクリット』獨學仕候他年歸京ノ時ノお土産ニナル程進ムヤ否ヤ」

とあり、更に十二月五日西崖宛書簡にも、

「梵獨字書東京ニテ得ラルベキヤ若シアラバ獨逸文ノゼエマント共ニ買入度存候亦例ノ二十五日ノ事也高楠君ノ教科書ハ差當リ不用ニ御坐候」

と見えている。梵獨辞書購入依頼と、高楠順次郎の梵語教科書の件が注意を牽く。この梵獨辞書は、小倉日記同年十二月二十四日の條に

「大村カッペルレルCappellerの梵語字書を贈り来る」

とあつて、南江堂辺りにあつた辞書を郵送したのだらう。Dr. Carl Cappeller はイエナ大学の梵語学教授で、一八九一年から九八年迄八四三頁の梵独辞典を編纂した由が、Sir M. Monier-Williams; Sanskrit-English Dictionary. Oxford, 1899, Introduction, xxxi に見えているが、この大冊だったのだろうか。当時の外国語学習の様子は十二月十九日弟潤三郎宛書簡に、

「午後三時退出直ちに衣服を更へて佛語教師宅に参り六時稽古済み歸りて湯をつかひ晩食し直ちに葉巻一本を啣<sup>くは</sup>えて散歩に出で申候一本がなくなるまで小倉の町を縦横無碍に歩めば丁度一時間位立ち至極體によろしく候それにて九時頃に相成申候それより佛語の手帳を淨書し又梵語を少しやれば十時半か十一時になり直ちに寐ることといはし候」と告げている。そして大村西崖が事に触れて、

「同人が小生に離れたるは小生と兩方の不利益にてこの頃もめさまし草へ出さんとて物書いて送り候へども間違多くして出されず二つの内一つはことわり一つは善く直して來春からでも出すことに返事いたし置候腹を立てねば好いがと存候へどもさりとてめさまし草には怪しいものは出されず眞直に申遣候」と内心を吐露してもいる。

明治三十三年（一九〇〇）一月七日付大村宛書簡、

「只今ゼエマン諸神傳獨文原本入手候に付早速御稿閲讀補正仕候而目不醉草に出し候様仕度存候。又梵語字書は御贈與被下候との事有難不堪喜候」

とカッペルレル辞書の礼を云っている。この年十月二十六日大村宛書簡に語學習得を云い、

「佛蘭西語ハ初の同志五十人ナリシニ一人減リ二人減リコノゴロ小生一人ト相成リ終ニ同志會解散イタシ候少シ遣レルヤウニナリシハ小生一人位ト存候サンスクリトハポツ／＼一人稽古スルノミニ候」

とある。漸く二十世紀に突入した明治三十四年（一九〇一）月不詳の母峰子宛の書状に、王陽明の実践哲学を説いた伝習録に触れて、

「王陽明が『行は智より出づるにあらず行はんと欲する心（意志）<sup>オコナヒ</sup>と行とが本なり<sup>モト</sup>』といふ説は最も新しき獨逸のヴントなどの心理學と一致するところありて實に面白く存候其外佛教の唯識論<sup>ユキシキロン</sup>とハルトマンとの間などにも餘程妙なる關係あり此の如き事を考ふれば私の如く信仰といふこともなく安心立命とは行かぬ流義の人間にても多少世間の事に苦めらるることもなくなり自得<sup>ジトク</sup>するやうなる處も有えやう存候」

と心境を伝えている。陽明學とヴントの心理學、唯識論とハルトマンの「無意識の哲學」の近似など、兎角小倉左遷の憂目に焦燥し勝ちな立場からの脱却と、その安心立命後のregination（諦念）への到達が窺われる。

すでに前年十一月二十三日の小倉日記に、

「曹洞の僧玉水俊虎（兢）將に小倉安國寺を再立せんとし、來りて勸進文稿を刪定せんことを請ふ。」

とあって、更に十二月四日

「俊兢予が爲めに唯識論を講ずること、此日より始まる。」

と記し鷗外の仏典親炙が法相宗基本文献「成唯識論」講読から始まった縁起が知らされる。わたくしが且て学窓に在った折結城令聞先生の唯識論講義を聴いたことがあった。閑藏の習慣を持たず、漸く國譯大藏經を手許に置き始めた頃だったが頗る難解であった思いが去來する。阿頼耶識の識層は今日流行のユングの深層心理學的認識論のルーツとも云えるであろう。鷗外のヴントやハルトマンの哲學を基礎に置いた唯識論へのアプローチは捷徑であつたに違いない。略一年の歳月を閲みしない内に峰子に遣つた書簡に、前記のような比較研究の一端を吐露している点注目に価しよう。玉水俊兢との交流親炙の様は、小説「二人の友」のなかに詳しい。

「安國寺さんは、私が小倉で京町の家に引き越した頃から、毎日私の所へ來ることになった。私が役所から歸つて見ると、

きつと安國寺さんが来て待つてゐて、夕食の時までゐる。此間に私は安國寺さんにドイツ文の哲學入門の譯讀をして上げる。安國寺さんは又私に唯識論の講義をしてくれるのである。安國寺さんを送り出してから、私は夕食をして馬借町の宣教師の所へフランス語を習ひに行つた。」

と記している。そして玉水俊堯と福間博の二人の友は、鷗外東歸の後にも跡を追つて東都に來り住んだ。しかし鷗外は繁忙を極めた生活を送つて以前の如き交渉を採れなかつた。

「そこで安國寺さんは哲學入門の譯讀を、私にして貰う代りに、F君（注、福間博）にして貰はうとした。然るに私とF君とは外國語の扱方が違う。私は口語にも文語でも、全體として扱ふ。F君はそれを一々語格上から分析せずに置かない。私はKoberさんの哲學入門を開いて、初のペエジから字を逐つて譯して聞せた。しかも勉めて佛經の語を用ゐて譯するやうにした。唯識を自在に講釋する力のある安國寺さんだから、それを丁度尋常の人がFichteや讀本を解するやうに解した。F君は此流義を踏襲することを肯ぜずに、安國寺さんに語格から教へ込まうとした。安國寺さんは全く違つた方面の勞力をしなくてはならぬので、ひどく苦んだ。」

とある。非凡なドイツ語学をもち、第一高等学校の語学教師として聘せられた福間博の教授法は、鷗外流義と全て違つて居た点玉水師を苦しめたに違いない。鷗外がケーベル先生の哲學入門を勉めて仏經の語彙を用いて訳述したことは、またわたくしをして刮目させずに置かない。鷗外閱藏のあつた證となるからである。閱藏の棧縁の一端は次の「獨身」という小倉時代を題材とした小説に窺がわれる。

「間もなく香染の衣を着た坊さんが、鬚の二分程延びた顔をして這入つて來た。（中略）寧國寺さんといふ曹洞宗の坊さんなのである。金田町の鐵道線路に近い處に、長い間廢寺のやうになつてゐた寧國寺といふ寺がある。檀家であつた元小倉藩の士族が大方豊津へ遷つてしまつたので、廢寺のやうになつたのであつた。（中略）この坊さんが近頃住まつてゐるのである。（中略）寧國寺さんは殆ど無間斷に微笑を湛へてゐる。瘦せた顔を主人の方に向けて、こんな話をした。

『實は今朝托鉢に出ますと、堅町の小さい古本屋に、大智度論の立派な本が一山積み重ねてあるのが、目に留ったのですな。どうもこんな本が端本になつてゐるのは不思議だと思ひながら、こちらの方へ歩いて参つて、錦町の通を且過橋の方へ行く途中で、又古本屋の店を見ると、同じ大智度論が一山ここにも積み重ねてある。その外法苑珠林だの何だのと、色々あるのです。大智度論も二軒のを合すると全部になりさうなのですな。』／主人は口を挟んだ。『それぢやあ態と端本にして分けて賣つたのでせう。』／『お察しの通りです。どこから出たといふことも大概分つてゐます。どうかすると調べたくなる事もある本ではあるし、端本にして置けば、反古にしてしまはれるのは極つてゐますから、いかにも惜しうございますので、東禪寺の和尚に話して買うて置いて貰ふことにして來ました。跡に残つてゐる本の内には、何か御覧になるやうなものもあらうかと思ひましたので一寸お知らせに参りました。』／『それは難有う。明日役所から歸る時にでも廻つて見ませう……』と。

これは身边小説であるが、安国寺の玉水師が托鉢時に古本屋を覗いて、仏典のあるのを鷗外に報知した折の軼事を伝えているに相違ない。大智度論、法苑珠林の名が見えている。

今日でこそ「大正新修大藏經」五十五卷が昭和四年二月に完成、さらに図像部、補遺を含めて集大成されて、わたくしも多くの便宜を得て居り、その他「国訳一切經」もあつて閲藏はいとも容易になつた。が二十世紀突入前後の藏經の出版は寥々たるものであつた。その消息を窺うのに深浦正文著「佛教研究法」（大正十二年二月、丙午出版社刊）第四章藏經の開雕が便利である。そのなかに次の様に云つてゐる。

「明治時代に至るや、泰西文明の惠澤により、印刷上に活版の術が傳へられるやうになり、乃ちこれを藏經開雕の上に應用せむとして、島田蕃根氏等東京に弘教書院を興して、明治十三年（一八八〇）より同十七年に至り、いはゆる『縮刷藏經』なるものが刊行さるゝに至つた。本藏は『麗經』を以つて底本とし、『宋』『元』『明』の三藏をこれに對校して、その異同を欄外に表示し、且彼此の缺本を補入して、その所収の數は著しく加増されかくして最も學術的特色を有してゐる。加ふ

るに菊版形の方冊本であつて取扱の便・購入の易等、到底『藥本』の比ではない。既刊藏經中第一の價值を有するものといふべく、爾後の學界がこれのために利便を稟けしところ、如何ばかりか測り知られぬ次第である。／その後明治三十五年（一九〇二）に至つて、京都藏經書院よりして、いはゆる『正藏經』なるものが刊行された。これは麗・明對校と稱する如く、かの忍徴の對校本を底本としたものであるから、その内容は『麗藏』と同一になつてゐるが、形式は全く『明本』即ち『藥本』そのままの襲用である。（中略）前の『縮藏』に比べてその學術的價值は<sup>はる</sup>復に劣るといはねばならぬ。本藏は明治三十八年（一九〇五）を以て完成し、その後同處に於ては更に引續いて『正藏』に洩れたる主として支那選述の章疏を收容して、『大日本續藏經』の名の下にこれを刊行し、大正元年（一九一二）を以て完成した。（前掲書二五―二六頁）

小倉日記明治三十四年三月十二日の記事に

「徳山に至る舟中桂本香林と語り縮刷藏經を買ふことを語る。桂林は西本願寺奉仕局員なり」

とあつてこの購入を云つてゐる。また續藏經について鷗外の関わる所があつて、明治三十七年四月九日從軍先より京都の藏經書院宛に、

「續藏の事いよく御決定小生をも評議員に御推選被下候由何の御助力にも相成不申候へども喜んで御請申上候／世々たちて今あみつかん卷かすもほとけやかねて定めましけん」

とあつて、出版評議員になつてゐるのが知られる。閱藏の経緯の一端はこれらの事実から推察されるだろう。

さて玉水師の唯識論講義は明治三十四年十月二十六日西崖宛書状に、

「唯識ノ勉強ヤット五卷ノ半（第三能變）迄ハカドリ候イヤハヤ讀メバ讀ム程面倒ナル事ニ候」

と洩らしている。この「成唯識論」については「望月佛教大辭典」（昭和三十二年四月、世界聖典刊行協会刊）3に

「梵名毘若底摩咀刺多悉提奢薩咀羅（Vijñāpatimātratāsiddhi-Sāstra）十卷、印度大乘釋經論部（縮往一〇、正三二）

護法等菩薩造、唐玄奘譯、又淨唯識論とも名づく。護法等の十大論師の釋論を繙譯して世親の唯識三十論頌を解説し、萬法唯識の理義を釋成せるもの。即ち初卷より第二卷の初に恒り、由假説我法等の一行半の頌を釋して、外道及び小乘の實我實法の執を破し、第二卷の中より第四卷の中に互り、初阿頼耶識等の二行半の頌を釋して初能變たる阿頼耶識の相を明し、第四卷の中より第五卷の中に互り、次第二能變等の三行の頌を釋して第二能變たる末那識の相を明し、第五卷の中より第七卷の中に互り、初に次第三能變等の一行の頌を釋して第三能變たる六識能變の相を明し（中略）次に第十卷の終を盡し、乃至未起識等の五行の頌を釋して唯識の相性に悟入する次第たる五位の相を明せり。」

と説明している。書簡中の第三能變のことは

「先づ第六意識の名義及び性相等を説き次に六轉識と相應する遍行等の六位の心所を廣説し」

とあつて認識に意・心・実相などの変転の姿を遍歴する由来を説く條まで、云つてみれば唯識論の半に達していいらしい。

小倉における鷗外の閲藏事蹟に係わるものは、明治三十五年（一九〇二年）一月元旦の福岡日日新聞に載せた黄檗宗「即非年譜」がある。その前言に

「衆口喧傳し、群籍具に載すと雖、其の尤も的確にして精詳を極むるものは、賓主聯璧に過ぎたるは莫し。斯書は明洞法雲の著すところにして、二篇を合刻して一卷を裝ひ成せり。曰廣壽即非和尚行業記、曰故豊前太守小笠原侍従源公（忠眞）墓碑銘即ち是なり。彼は寛文十二年（一六七二）壬子五月の記述たり。此は同九年己酉八月甲戌の結撰に係る。予の年譜を作るや、主として聯璧の本文に據り、兼ねて即非禪師全録、法雲禪師壽山外集（實光編録）の二書を采る。唯憾む友人麻生君の、福聚の府庫中より求め得たところのもの、全録は卷一聖壽山崇福禪寺語録、卷二廣壽山福聚禪寺語録、卷二十一より卷二十三に至る詩偈の五卷に過ぎず、壽山集は上存して下闕け、遂に探討未だ偏ねからず、編萃猶疎なるを致すことを。茲に姑く一本を繕寫して、以て識者匡謬補缺を俟つと云爾」



とある。このなかの麻生は麻生作男で、この年の四月一日の書牘のなかに、

「在小倉中ハ色々御世話ニ相成奉謝候就中立花家ニ關スル文書借寫ノ件ニ付御盡力深ク感謝スル所ニ御座候」

とあるのからも知られよう。黄檗宗の帰化僧即非如一の年譜を作ったのには、小倉在住間長崎・肥前・豊前などの黄檗宗と曹洞宗の動きに関心興味を持ったことも、その契機となっていたのではなからうか。玉水俊競と因縁の深い東禪寺の釈文器の碧巖録の提唱にも出席していることが、小倉日記のなかに散見される。先づ、明治三十年十一月十一日、

「日曜日雨、釋文器碧巖を東禪寺に提唱すること、此日より始まる。文器は片山氏に生る。東禪寺の住職なり。」

から始まり、翌年一月十四日、「略本曆」七時東禪寺、四月十三日「略本曆欄外」二時半寺、四月十五日「略本曆欄外」七時東禪寺、二十日も同じく東禪寺、二十二日五時東禪寺と見えていずれも碧巖録の提唱を聴問したと思われる。

この即非釋如一の伝は種々あるが、竺道契撰述慶應三年（一八六七）「續高僧傳」十一卷があつて、これは大正六年三月に「大日本仏教全書」のなかに輯載されたのが、活字流布本で、その巻第五に浄禪三之一、豊前廣壽山沙門如一傳として讀むことができる。鷗外の即非年譜と多少の異同があつて、その考讐は興味深いけれども今回は割愛する。尚望月佛教大辭典第五卷（昭和三十二年二月補訂版）に如一にょいつの項があつて簡略な伝が載っている。その参考文献に續日本高僧傳の他に

「甲子夜話第六十二、蘿月菴國書漫抄第一、日本名勝地誌第十等に出づ」

とあるが、この鷗外稿「即非年譜」を挙げて居ないのは失当としか云いようがない。

尚玉水俊競師の上京について、「獨身」のなかに大智度論、法苑珠林等の仏典購入を依頼したことのある東禪寺住職である柴田董之宛の書状に、

「先日玉水師一條ニ付來書委曲承知仕候へドモ右ハ師ヨリ返信可有之小生ヨリノ御答ハ徒爲ニ屬可申ト存ジ等閑打過失禮仕候師ハ大熱心ニテ勉學被成候へユエ必ずヤ遠カラズ奏功セラレ可申ト信居候、東禪寺方丈ハジメ一時ハ御不同意ト奉存候へドモ御申ナダメ置被下度存候」

とあつて、問題が伏在していたことを窺わせる。彼の大村西崖が東洋美術のなかで仏教美術、さらには仏典の蘊蓄が可成りあつて、後年、「密教發達志」によつて学士院賞を獲たのも、左こそと思われ、次の「阿育王事蹟」共同執筆に継がるのも当然と云えよう。例の續藏經の購入についても面白い證言がある。小説「不思議な鏡」の冒頭に新年早々お上さんとの遣り繰りに触れて、

「本の代も随分大變あつてよ。續藏經なんぞ、あれはいつまで出るのでせう。もう置場所にも困るのですが、際限がないのね。大日本史料に古文書に古事類苑、まああんなのは知れたものです。矢つ張一番多いのは西洋の本よ。」

と嗟嘆させている。この小説は明治四十五年一月号「文章世界」に載つたのだから、續藏經の完成が大正元年と改元したこの年に完結したのだから、お上さんの杞憂に終つたのが分る。鷗外の閲藏の源の一つがこの大藏經編輯物であつた。

#### 四、「阿育王事蹟」執筆、上梓を巡つて

明治四十二年一月一日、文学博士高楠順次郎、森林太郎・大村西崖同著「阿育王事蹟」が春陽堂から刊行された。第一回鷗外全集には収録されず、第二回岩波版鷗外全集、著作篇第九卷（昭和十二年五月刊）史傳四に西周傳、能久親王事蹟ギョオテ傳と共に収載された。所が第三回鷗外全集には収録されなかった。その経緯について、第四回鷗外全集第四卷（昭和四十七年二月、岩波書店刊）に再び収載されて、後記のなかに次の様な記事が見られる。

「昭和二十八年三月十日刊の『鷗外全集』著作篇第十一卷の「後記」を次に引く。(中略)〈共著者の大村西崖氏の令嗣大村文夫氏の書かれた「鷗外先生と父西崖との關係」(鷗外研究第二十一號)といふ文章を根據として収録しないことにしたのである。記載によれば、大村文夫氏所藏の校本に左の如き西崖の識語がある。〃森鷗外先生初めハルヂイの『阿育王』を抄譯し、余に勸むるに、これを増補して同著と爲さむことを以てす。その稿凡そ四五十紙、叙述極めて簡略にして考證なきのみならず、王の刻文の翻譯さへなし。余仍りて諸書を渉獵して事蹟を考證し、刻文を譯し、圖畫を加へ、以て全くその稿を改む。十六章二百五十紙、全く余の述作と爲り、鷗外先生の稿は特に獨逸書より得たる材料の多少を余の研究に益したるに過ぎず。余の先に先生と同著せし審美綱領は先生の力多きに居る。この書の効力以て前者に於ける先生の徳に報じ得たことを信ずと云爾、西崖識これによれば、『阿育王事蹟』は大村西崖の著述と見るべきであり、『凡そ四五十紙』の鷗外先生の抄譯稿が全集の資料となり得るのだが、それは現在搜尋することが出来ない。齋藤茂吉識〃右のような事情であつたが、最近、本篇の原稿のうち、本文と年表は大阪府立圖書館に架藏されていることが分つた。本文一〇〇紙、年表二紙である。／本文一〇〇紙のうち、鷗外の原稿そのまま、あるいは西崖の補訂を経て印刷に付せられたものは次の通りである。／第一紙―第七紙、第九紙―第十紙、第九十七紙―第百紙(計十三紙)／さらに鷗外の原稿を抹消して裏面に西崖が書いたものが一三紙ある。／さらに西崖筆の部分にも欄外に朱で、?を付したり、本文の文字を別筆(鷗外筆とは判定しがたい。あるいは高楠順次郎筆か。)で訂正している箇所もある。／右の鷗外原稿を鷗外の付した丁付順に並べると6―7、9―10、26―31、35―42となり、三紙丁付不明である。鷗外丁付の42が第百紙、つまり本文の末尾に當る。このことから『凡そ四五十紙』とは四二紙と推定され、そのうち二六紙が存在していることになる。／本全集ではこの作品を改めて同著の作品としてここに収録する。」(前掲書、六四四―六四五頁)

この「阿育王事蹟」の鷗外と西崖との同著作成過程なのだが、すでに前々章で触れた鷗外抄訳が Edmund Hardy; *Indiens Kultur in der Blütenzeit des Buddhismus, König Asoka, mit einer Karte und 62 Abbildungen,*

Meinz, Verlag von Franz Kirchheim, 1902 で、海旭先生指摘する通俗書の一冊である。新版鷗外全集第四卷の月報4に小堀桂一郎氏の「翻譯原本及び創作の素材について（一）」にハルデイ著「アソカ王」の原本を探求する所から始まり、該書が鷗外文庫から京城帝大に移管されて、現在ソウル大学図書館蔵儲なっている由を確かめられ、そのコピーを獲たが、残念ながら文字、符號の類の書入れは見當らないことも確かめられた。わたくしは神田一誠堂にて偶然原本を購つて架藏して居り、その訳注を試みたことがあつた。今小堀氏の博搜の文章を紹介し、方々その補注を加えたい。

「參考までにこの書の目次を譯して紹介してみるならば、I、アレクサンダー大王のインド遠征とその結果・マウリア朝／II、アソカ王の誥文／III、政權擔當以前のアソカ王・即位／IV、群小諸侯との外交關係／V、王國・官僚組織／VI、アソカ王の佛教歸依／VII、宗教的平和のために達磨（Dhamma）福祉事業・藝術振興／VIII、佛教の庇護者／IX、係族中の悲劇・アソカ王の偉大／の九章から成る。

右のうち、稿本中鷗外自筆の部分に最も多く生かされてゐるのは第九章の「系族中の悲劇」の記述で、これが鷗外の草稿「拾貳」「拾參」に當り、單行の定本（本全集本文と同形）阿育王事蹟では「拾參 眷屬」に取入れられることになった。このクナアラ王子の傳説はハルデイ本ではかなり入念の筆を費した。全篇中でも讀物としても最も體裁の整つた一章である。鷗外の筆つきにも再話小説をものしてでもゐるやうな感興のうごきがうかがはれる。ほかに定本附載の圖版も幾葉かはこのハルデイ本から採られてゐる。

ところで自筆稿本の「壹 前紀」のかなりの部分と、「拾伍」から「拾捌」までのすべての記述は、ハルデイ本の範圍からはみ出すのであるが、これらはどの典據に依つたものであらうか。單行本阿育王事蹟には本文の後に付録として引用書目が載せてあり、和・漢・洋書合せて相當の點數にのぼるので、その中から典據として用ひられたであらう書物を檢出するのは一見容易ではないやうに見える。だが實際はそれほど難しいことはないで、この書誌と鷗外文庫所藏のインド史、佛教、

梵文學關係の文獻類とを比較勘案してみると、鷗外がこの著述に際し参照したであらうと思はれるものは（暫く洋書に限つて言へば）前記の「アソカ王」のほかには次の五點くらいしか候補に上つて來ない。

Edmund Hardy; Buddha, Leipzig, G. J. göschensche Verlagsbuchhandlung, 1903. (131S.)

Hermann Oldenberg; Buddha, Sein Leben, Seine Lehre, Seine Gemeindegew. Auflage, Berlin, Verlag von Wilhelm Hertz, 1897, (460S.)

Do; Die Religion des Veda. Verlag von Wilhelm Hertz. Berlin, 1894. (620S.)

Do. Die Literatur des alten Indien, Stuttgart und Berlin, 1903. J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger (293S.)

Christian Lassen; Indische Altertumskunde, I ~ IV. Leipzig, Verlag von L. A. Kittler, 1858-74.]  
とされた。

例の阿育王事蹟附録の書目の冒頭にこれらドイツ語の仏教研究書が並べてあり、H. Oldenberg; Dīpavamsa (English Translation) London, 1879 が脱けている。渡邊海旭氏が

「パーリ語學界否佛教學界に忘るべからざる大事業即タルデンベルヒ教授Hermann Oldenbergの律藏本文全部の出版である。（中略）千八百七十九年に初まり今年大品を出し翌年息をも繼がず小品を終り八十三年までに歴然たる全部律藏の校訂を終へて了つた其精力の絶倫と頭腦の明敏なる實に驚嘆の外はない。（中略）更に喫驚すべきは全氏は律藏公刊の初めに當りて夫の大史と姉妹史とも云ふべき極めて重要な佛教史Dīpavamsaに英譯を付して公刊した。是又佛教學上缺くべからざる至貴至重の資料の一つである。」（前掲書、四四―四五頁）  
とした名著を加えている。

Vincent A. Smith; Rulers of India, Asoka, The Buddhist Emperor of India, Oxford, at the Clarendon

Press, 1901 (204P.) は恐らく当時入手し得る最高の阿育王伝であつて、わたくしが中村元先生の講筵中にあつた折、屢々言及されて推賞し嗜讀を薦められたことがあつた。インド古代史として V. A. Smith: *The Early History of India, from 600 B. C. to the Mahamadan Conquest including the Invasion of Alexander The Great*. Oxford at the Clarendon Press, 1924 をも併讀を促された。その折 Christian Lassen: *Indische Altertumskunde I-IV* がインド古代百科辞典の雄として座右に置くべき著作とされ、その約百年にならうとする現在も決して蔑ろにできぬ由に及ばれ、最近フランス仏教学界で世に送つた Louis Renou, et Jean Filliozat, Pierre Meile, Anne-Marie Esnoul, Liliane Silburn: *L'Inde Classique, avec Vingt-huit figures et une Carte de L'Inde hors texte*, Payot, Paris 1947. 1963 の二冊本を挙げて参考に供すべき佳作とせられた。わたくしもこの二種のインド文化百科辞典を座右に置いている。小堀氏もラッセンの「インド古代誌」こそ鷗外のインド学仏教学の基礎をなしたものと指摘された。

「これは實に龐大な著述といふべきものであつて、各卷千乃至千二百ページ、全四卷の完結までに十六年を費してゐる。この第二卷は『ブッダから前期グプタ王朝までの歴史及び文化史の概観』と題され、その中の「アレクサンダーのインド遠征」「アレクサンダーの歴史的使命」等の項目が「前紀」に利用されたこと、また當のアソカ王の史實についての多少この書から補はれたことが讀みとれる。特に稿本の「拾伍」から「拾捌」まで、即ち定本で「拾陸・後紀」としてまとめられた部分は、「拾伍」が同じ第二卷から、「拾陸」以下が同書第三卷『キリスト紀元三一九年バルラビ王朝及びグプタ王朝の開祖から回教徒のインド侵寇開始まで』の中の諸章から抄記したものであつた。」

と小堀氏は逐一檢證せられている。

彼の海旭先生もクリスチャン・ラッセンに就いて触れ、

「大天才ビュルヌーフの快手腕で充分に料理し咀嚼せられて、時代を作つた大著『印度佛教史緒論』(Eugen Burnouf; L'

introduction a l'histoire du Bouddhisme indien. 1844) が新研究創業の大功蹟を學壇に立てた。(中略) 此書出でて已來佛教に關する著作は悉く範を茲に仰ぎ斯學のアウソリテイとして今に其價を維持しつつある。其一例として挙げれば氏の同窓クリスチャン・ラッセンの印度學藝綜合の大傑作『印度古學』<sup>インディシエ・アルツームクンデ</sup>の第二卷佛教史に關する部分の如きが即それだ。」(前掲書、一三四頁)と推重されている。

書目のなかでドイツ語によるものは以上であつて、以下十八点は全て英語文献であつて、西崖識語に「鷗外先生の稿は特に獨逸書より得たる材料の多少を余の研究に益したるに過ぎず」、とするのを裏書きする印象がある。とくにアレクサンダー・カニングハム Alexander Cunningham は初代印度考古局の總裁でもあり、考古美術の組織的調査研究と遺跡遺物の保存に功勞のあつた精力的學者でもあつた。インド考古学研究 Archaeological Survey of India の一八六二年から一八八四年二十三冊に及ぶ報告書は、以後マーシャル John Marschall によつて受継がれ Archaeological Survey of India Annual Report 1902-3 の元に毎年広翰な書冊として刊行され、インド考古美術研究にとつての必須の文献となつている。これらは在学中、印度哲学科の研究室に架藏されて、しかも禁帶出版として珍重されていて、わたくしも屢々出入して瞥見した記憶がある。これら貴観本は最近インドの出版屋が複刻を企てわたくしの座右に置けるようになった。とくに「インド碑銘文集成」Corpus Inscriptionum Indicarum, Calcutta, 1877 は、当時発見されたアショーカ王碑銘文の原文、英訳注があるもので、「阿育王事蹟」第五阿育王の法話等の原文、とあるのがこの集成によつてゐること論を俟たない。この碑銘文の英訳は既に触れた Vient A. Smith; Asoka, The Buddhist Emperor of India, 1901. に第三章遺物、第四章石刻銘文、第五章石窟と石柱銘文中に訳出されているので、西崖氏も容易に讀み得た筈である。邦訳が何故附載されなかつたのか不審であるが、附図の欠除と云い版元の意図から削除されたのかも知れない。その後新発見の碑銘文もあり、今日碑銘文の全貌を窺うには Jules Bloch; Les inscriptions à Asoka, Traduites et commentées, Paris,

1950 が最も便利かつ充足できる。邦文では塚本啓祥氏「アショーカ王碑文」（一九七六年一月、第三文明社レグルス文庫54）があつて、前著を底本として居られアショーカ王碑文の全貌を理解する手頃な案内書として推賞したい。解説、参考文献は発見、解讀の歴史を俯瞰し、更に史的背景を知るのに役立つ洋書、邦文書を挙げて居られ親切である。尚管見によつて補うとすると、山崎元一著「アショーカ王とその時代」（一九八二年七月、春秋社刊、二八二頁）、木村日紀著「アショーカ王とインド思想」昭和六十年六月、教育出版センター刊、二四五頁）などが出版されていて、「阿育王事蹟」の先駆的・啓蒙的な訳述書から発した、吾が国のインド学・仏教学の発達をアショーカ王研究を通じて知ることができる。

彼カニングハムの考古学的知見は「The Stupa of Bharhut, London. 1879」の図録研究からも窺われるが、インドの初期仏教美術の遺構として現在カルカッタ博物館に移築復元された門橋欄楯の、原初の姿を紹介している点貴重である。アショーカ王が在世中に建立したと伝説にあるアショーカ王八万四千塔ストウパの一つであり、今日サンチー、ボドガヤーに遺構を留めるに過ぎないが、バルフト塔婆ストウパ紹介の意義は大きい。インド貨幣学は、歴史的文献の皆無なインドにあつて年代学を構築するのに必要な学問領域であるが、その貨幣蒐集に努めて整理研究した成果が「Coins of Ancient India, London. 1891」であつた。これから「Book of Indian Eras, Calcutta, 1882」のインド王朝の年代変遷を辿つた作品に結実する。もちろん、先駆者の常として思考錯誤があつて訂正される運命にあつたが、アショーカ王を中心とするマウルヤ王朝の編年に資する所があつた。インド建築美術についてはジェームス・ファガソン James Fergusson: History of Indian and Eastern Architecture, 2 vols, London, 1899, Cave Temples of India, 1880, Illustrations of the Rockcut Temples of India, London, 1990 亦「Tree and Serpent Worship, London 1873」はインドの聖樹ナールガと蛇信仰の造形遺品から探つた大冊で、バルフト、サンチーの塔婆ストウパの紹介を兼ねて、焼付写真を貼付した豪華版である。



この書目に、後に中央アジア考古調査で世界的著名学者となったオーレル・スタン卿の若年の砌の「カシュミール王統年代記」訳注本、Kalhana's Rājataranginī, A Chronicle of the Kings of kashmir, translated, with an Introduction, Commentary, an Appendices, by M. S. Stein, Westminster 1900, 2. vols, が挙げられているが、大村西崖の目配りの廣さを示すものとして注目に価する。カシュミールを統治したアショーカ王の文献資料として重要なものだからである。亦 A. Grünwedel: Buddhist art in India, Trans. By A. C. Gibson, Revised and Enlarged by T. Burgess, London 1901 は元来ドイツ語版でベルリン国立博物館の手引書として綴った Buddhistische Kunst in Indien, Berlin and Leipzig, を Burgess が徹底的に増補英訳したものであつて、鷗外もドイツ語版を所有嗜讀したかと推想されるが、この英訳本によつて流布したことは間違いない。因にこの邦訳が前田慧雲編著として博文館百科全書の一冊、「佛教美術」(明治三十九年七月、博文館刊)邦訳されて居り、当然書目のなかに挙げられてよい著作と云えよう。大村西崖の視野の中に在った筈の書物である。

書目のなかに漢訳經典が數多く挙げられていて、西崖氏による参考書目の趣が見られる。その多くが「正藏經」に収載され、「續藏經」に中國撰述された經典として玄奘・義淨・法顯らの求法旅行記、道世撰の「法苑珠林」僧祐の「釋迦譜」が列擧されている。この中に南條文雄著 Catalogue of Tripitaka, The Sacred Canon of the Buddhist in China and Japan, Oxford, 1883 「大明三藏聖教目錄」があり、明版漢訳大藏經の英文目錄で、インド学・仏教学の指針となる仏書解説辞典の雄であつた。現在補正索引を付けた「大明三藏聖教目錄」として、昭和五十二年六月、開明書院から復刊されて容易に入手できるようになった。「佛書解説大辭典」の刊行によつて不朽の名著の存在が影薄くなつたが、わたくしの座右にあつて經典検索の指針となつてゐる。この他同じ經典内容を解説し、閲藏の指針となるものに智旭撰「閲藏知律」全十冊がある。わたくしは鷗外の仏教学に関心を懷いてゐた折、木下杢太郎の「或日の森鷗外先生」(「藝林間歩」、一九三六年六月、岩波書店刊)末尾に、

「僕はこの日に佛典に關する大體の見當をつけるのには『閲藏知律』という本が可いといふことを教はつたが、爾來その本を買ひもせず、又閲讀せずに今日に及んでゐる。」（前掲書、六五頁）

を読んで、一度目賭したいと思つていた。昭和二十六年辛卯正月八日に神田神保町の漢籍専門書肆山本書店でこの帙入本を購つた。光緒十八年（一八九二）夏四月金陵刻經處識の識語をもつ鐫本で、鷗外の閲藏の指針として珍重利用している。邦人のインド仏教研究書を列挙しているが、井上哲次郎著「釋迦牟尼傳」（東京文明堂刊、明治三十五年）、姉崎正治著「上世印度宗教史」（博文館明治三十三年刊）、同氏著「印度宗教史考」（博文館、明治三十一年刊）。松本文三郎著「佛典結集」（佛教史論第一編、明治三十六年九月、文明堂刊）を挙げているが、第三阿育王の事蹟並びに第三結集（八三―一三〇頁）、附録、阿育王碑、（一四一―一八二頁）マヒンダ王子の事蹟、（一八三―二二五頁）マウルヤ朝諸王年代比較表があつて資する所があつたに違ひない。既に鷗外の陸軍軍醫部の上司であつた長瀬時衡の仏教知識について言及した折、藤井宣正にも触れたことがあつたが、彼の「佛教小史第一卷印度部」（明治廿七年九月、大谷津逮堂刊）同第二卷印度部（明治廿九年六月、大谷津逮堂刊）の二冊も書目のなかに挙げられている。第二卷第三章佛滅第三世紀以後ノ佛教（七九―一三七頁）はアショーカ王治世の仏教事情碑銘文について克明な記述があり、この著作は鷗外、西崖両者の嗜讀を唆つた著作と考えられる。

こうして『阿育王事蹟』を見てくると、大村西崖が参考書目のなかでも博搜努力した迹がほの見えてくる。鷗外が得意なドイツ語文献を駆使して文を綴つたことも分つてくる。大村西崖のインド学・仏教学の智識が、漢訳經典、英語系のインド学・仏教学、加えて考古美術知識の上に成立つていたことも検証されてこよう。既に鷗外書簡に見られた西崖評のなかに、語学の面でも措辞の面でも雜駁粗惡の譏りは免かれなかつたことも事實である。「阿育王事蹟」のなかに鷗外独自の史觀が大きく裏打ちされていること、小堀氏の指摘の如くである。すなわち、

「作者の筆はこの『後紀』に至つて、アソカ王没後の系族の消息を越えてインド史そのものの流れに沿つて下りつづけ、ほ

んの略述といふ形でてはあるにせよ、實に千八百七十七年にまで及んでゐる。これは澀江抽齋に於て確立したあのスタイル、史傳の主人公について説き了へた後、子孫の系譜の遠い行末までその消息を追跡してやむことを知らぬ（中略）この僅かの覺書を作るために鷗外は實に頼しい書物の頁を讀破したらしいのであり、またこのときの研究が「かのやうに」の主人公をして「迦膩色迦王と佛典結集」といふ卒業論文を製作するといふ設定に自づから反映したのもあらう。」と。

わたくしも氏のこうした結論に対して滿腔の賛同の意を表したい。

## むすび

わたくしは假染に筆を執つて「森鷗外とインド学・仏教学」と題して管見に及ぶ限り、年来蒐集蘊釀してきた資料を元に綴つてみた。紙数の制限もあつて、戯曲ブルムウラ、及びその由來についてインド学の立場から触れ度と思ひながら、小堀氏の指摘中に言及された部分のあることを悉つて割愛した。鷗外のこの面での学識と業績は氷山の一角だと思つてゐる。「寒山拾得」が寒山詩から出てゐるが、その縁起に

「實はパパアも文殊なのだが、まだ誰れも拜みに來ないのだよ。」

と述懐するなかに、荷風の所謂「進み過ぎた人の悲哀」がひし／＼と感じられてならない。インド学・仏教学の分野でも聊かの違いはないと思われる。小堀氏は「かのやうに」の主人公五條秀麿が選んだ卒業論文も、クリスチャン・ラッセンの「印度古代誌」讀破の波沫の一つとされた。

「秀麿は學習院から文科大學に這入つて、歴史科で立派に卒業した。卒業論文には、國史は自分が墨生の事業として研究するつもりであるのだから、苟くも筆を著けたくないと云つて、古代印度史の中から、「迦膩色迦王と佛典結集」と云ふ題を選んだ。これは阿輸迦王の事はこれ迄問題になつてゐて、此王の事がまだ研究してなかつたからである。併しこれまで特別

にさう云ふ方面の研究してゐたのではないから、秀麿は一步一步非常な困難に撞着して、どうしてもこれはサンスクリットを丸で知らないでは、正確な判断は下されないと考へて、急に高楠博士の所へ駆け附けて梵語研究の手ほどきをして貰つた。云々」

とある一文である。先に紹介した松本文三郎博士の「佛典結集」のなかには、カニシカ王の仏典結集の問題が扱われていない。換言すればこれが如何に難問中の難問か分るであろう。彼の藤井宣正氏の「佛教小史」第二卷の「第五章佛滅第五世紀ノ佛教」は、迦膩色迦王（かになしきか）の治世と大乘仏教の興起、仏典結集の有無について詳細に論及している。（一八八―二四三頁）しかし多くの難問が伏在していること秀麿の嗟嘆は今日でも解消していない。ガンダーラ仏教美術に纏わる「仏像の起源」も未だ解決していると云い難いからである。これらを此処に開陳する餘裕がないので、拙稿「遊牧と農耕の峽にて」（一九九三年五月、学生社刊）九章、十章に縷説し、参考図書も紹介して置いたので、好事の君子の閲讀されるよう望みたい。鷗外はこの複雑多岐な大乘仏教成立期に着目していたと云つて過言であるまい。

このことは更に「キタ・セクスアリス」の主人公金井湛君（しづか）を鷗外分身として見る時、次の文章も興味を牽く。「金井湛君は哲學が職業である。哲學者といふ概念には、何か書物を書いてゐるといふことが伴ふ。金井君は哲學が職業である癖に、なんにも書物を書いてゐない。文科大學を卒業するときには、外道哲學とSophistes（ソフィステス）前の希臘哲學との比較研究とかいふ題で、餘程へんなものを書いたさうだ。」

とある。インドの六師外道哲學思想とギリシアのソクラテス以前の哲學思想との比較研究と云うテーマが明示されている。わたくしが学窓に在った砌、中村元先生の「比較思想論」を諦聴したことがあった。後に一本に纏められた「比較思想論」（一九六〇年九月、岩波書店刊、岩波全書247）の骨子であつた。その折比較思想研究に従事されて居られる同僚の一人として、川田熊太郎先生の業績を紹介・嗜讀を薦められた。ギリシア哲學を専攻せ

られて、「プラトンの辨證法の研究」(昭和十五年十二月、河出書房刊)、「ギリシア哲學研究」(昭和二十一年十二月、河出書房刊)「哲學小論集」(昭和二十三年 河出書房刊)などの著作があったが深く仏教思想を考究する篤学者の由であつた。先生は後に「仏教と哲學」(一九五七年三月、平樂寺書店刊)で比較哲學的アプローチを果された許りでなく、広翰な「比較思想研究」Ⅰ―Ⅲ(昭和六十年三月、法藏館刊)三冊を上梓され、印欧比較哲學の基礎、比較哲學の課題と方法、西洋哲學における自我思想とアトマン思想との比較と云つたテーマに、金井湛君を髣髴たらしめるものがある。中村先生は講筵中に在つてDr. Paul Deussen: Allgemeine Geschichte der Philosophie, mit Besonderer Berücksichtigung der Religionen, 6 Bände, Leipzig. F. A. Brockhaus, 1920を西欧哲學の視座を有するものとして掲げられた。その広翰なる哲學史六冊の前半三冊がヴェーダ哲學からウパニシャッド、そして仏教哲學に及んでいる。渡邊海旭氏は、

「ウパニシャット研究の師宗ドイッセン(中略)の名が出たから序に其傑作『アルゲマイネ・ゲシヒテ・デル・フイロソフィ哲學一般史』の中佛教に關する記述に就き一言する。惜め哉此碩學は其哲學史上の敘述單に小乗教に止まりウパニシャット特に吠壇多とは思想上大關係ある大乘哲學の評論は殆ど絶無に近い。」(前掲書、一三八―一三九頁)

とされたが、川田先生はその欠を補つて余りある勞作を先の「比較思想研究」Ⅰ、Ⅱ、のなかで充分に果された。彼のPaul Deussenの著作は当然鷗外の視野のなかにあつたと見てよく、就中Das System des Vedānta nach den Brahmana Sūtra's des Bādarāyana, Leipzig, F. A. Brockhaus, 1906は實目ゝれてゐたに違ふなう。この稿を擱くに當つて一言する。

森鷗外先生の知的好奇心がインド學・仏教學に及んでいたことを、管見の元に一望してみた。とくに閲藏とドイッ・インド學親炙がその基調をなしているが、幸田露伴學人との交流に閲藏への関心と興味を触発せられたことが、多大であつたろうことをわたくしは推定している。大村西崖も元よりその功を頌つものだが、露伴學人の

小説、随筆中に流露する閲藏の美果を鷗外が感得しなかった筈がないからである。そしてわたくしは露伴学人の閲藏の事蹟を彼の文業中に探ってみたいと冀望している。

（平成庚辰歳正月晦、摺筆）

## Summary

### Mori Ōgai's Connection with Indology and Buddhism Jiro Sugiyama

森鷗外とインド学・仏教学（杉山）

Mori Ōgai (森鷗外) is one of the most famous Authors in modern Japan. He not only created many works of fiction, dramas, and critical essays, but also translated many examples of Western and the Eastern thought. He was a humanist and an enlightenmentalist (Aufklärer).

In this essay, I attempt to study his curiosity about Indology and Buddhism, of course, he had knowledge of Chinese classical literature, Confucianism and Taoism. However, his study of Buddhism in particular started when he was a medical student. Later, while studying in Germany (1884~1888), he confuted the opinion of Dr. E. Nauman, a geologist who was then living in Japan, with regard to Buddhism.

Mori Ōgai also made a study of the Sanskrit language, of Indology as well as of Buddhism, and he collected Chinese Tri-pitaka Sūtras as published by Tokyo Shoin.

Especially, together with, Mr. Ōmura Seigai (大村西崖) he translated Edmund Hardy's "*König Aśoka*", with reference to Christian Lassen's *Indische Altertumskunde*. This book was a pioneer guide-book about King Aśoka. Mori Ōgai's Indological and Buddhistic knowledge gives rich evidence of his creative talent.